悪獣篇

泉鏡花

一

つれの夫人がちょっと道寄りをしたので、銑太郎（せんたろう）は、取附（とっつ）きに山門の峨々（がが）と聳（そび）えた。巨刹（おおでら）の石段の前に立留まって、その出て来るのを待ち合せた。

門の柱に、毎月（まいげつ）十五十六日当山説教と貼紙（はりがみ）した、傍（かたわら）に、東京……中学校水泳部合宿所とまた記してある。透（すか）して見ると、灰色の浪を、斜めに森の間（なか）にかけたような、棟の下に、薄暗い窓の数、巌穴（いわあな）の趣して、三人五人、小さくあちこちに人の形。脱ぎ棄（す）てた、浴衣、襯衣（しゃつ）、上衣（うわぎ）など、ちらちらと渚（なぎさ）に似て、黒く深く、

背後（うしろ）の山まで凹（なかくぼ）になったのは本堂であろう。輪にして段々に点（とも）した蠟（ろう）の灯が、黄色に燃えて描いたよう。

向う側は、袖垣（そでがき）、枝折戸（しおりど）、夏草の茂きが中に早咲（はやざき）の秋の花。いずれも此方（こなた）を背戸にして別荘だちが二三軒、廂（ひさし）に海原（うなばら）の緑をかけて、簾（すだれ）に沖の船を縫わせた拵（こしら）え。刎釣瓶（はねつるべ）の竹も動かず、蚊遣（かやり）の煙の靡（なび）くもなき、夏の盛（さかり）の午後四時ごろ。浜辺は煮えて賑（にぎや）かに、町は寂しい樹蔭（こかげ）の細道、たらたら坂（ざか）を下りて来た、前途（ゆくて）は石垣から折曲る、しばらくここに窪（くぼ）んだ処、ちょうどその寺の苔蒸（こけむ）した青黒い段の下、小溝（こみぞ）があって、しぼまぬ月草、紺青の空が漏れ透くかと、露もはらはらとこぼれ

咲いて、藪（やぶ）は自然の寺の垣。
ちょうどそのたらたら坂を下りた、この竹藪のはずれに、草鞋（わらじ）、草履、駄菓子の箱など店に並べた、屋根は茅（かや）ぶきの、且つ破れ、且つ古びて、幾秋（いくあき）の月や映（さ）し、雨や漏りけん。入口の土間なんど、いにしえの沼の干かたまったをそのままらしい。廂は縦に、壁は横に、今も屋台は浮き沈み、危（あやう）く掘立（ほったて）の、柱々、放れ放（ばな）れに傾いているのを、渠（かれ）は何心なく見て過ぎた。連れはその店へ寄った［＃「寄った」は底本では「寄つた」］のである。
「昔……昔、浦島は、小児（こども）の捉（とら）えし亀を見て、あわれ

と思い買い取りて、……」と、誦（すさ）むともなく口にしたのは、別荘のあたりの夕間暮れに、村の小児等（こどもら）の唱うのを聞き覚えが、折から心に移ったのである。

銑太郎は、ふと手にした巻莨（まきたばこ）に心着いて、唄をやめた。

「早附木（マッチ）を買いに入ったのかな。」

うっかりして立ったのが、小店（こみせ）の方（かた）に目を注いで、

「ああ、そうかも知れん。」と夏帽の中で、頷（うなず）いて独言（ひとりごと）。

別に心に留めもせず、何の気もなくなると、つい、

うかうかと口へ出る。

「一日（あるひ）大きな亀が出て、か。もうしもうし浦島さん——

」

帽を傾け、顔を上げたが、藪に並んで立ったのでは、此方(こなた)の袖に隠れるので、路(みち)を対方(むこう)へ。別荘の袖垣から、斜(ななめ)に坂の方を透かして見ると、連(つれ)の浴衣は、その、ほの暗い小店に艶(えん)なり。

「何をしているんだろう。もうしもうし浦島さん……じゃない、浦子さんだ。」

と破顔しつつ、帽のふちに手をかけて、伸び上るようにしたけれども、軒を離れそうにもせぬのであった。

「店ぐるみ総じまいにして、一箇(ひとつ)々々袋へ入れたって、もう片が附く時分じゃないか。」

と呟(つぶや)くうちに真面目(まじめ)になった、銑太郎は我ながら、
「串戯(じょうだん)じゃない、手間が取れる。どうしたんだろう、おかしいな。」

二

とは思ったが、歴々(ありあり)彼処(かしこ)に、何の異状なく彳(たたず)んだのが見えるから、憂慮(きづかう)にも及ぶまい。念のために声を懸けて呼ぼうにも、この真昼間(まっぴるま)。見える処に連(つれ)を置いて、おおいおおいも茶番らしい、殊に婦人(おんな)ではあるし、と思う。

今にも来そうで、出向く気もせず。火のない巻莨(まきたばこ)を手にしたまま、同じ処に彳んで、じっと其方(そなた)を。何(なん)となくぼんやりして、ああ、家も、路(みち)も、寺も、竹藪(たけやぶ)を漏る蒼空(あおぞら)ながら、地(つち)の底の世にもなりはせずや、連(つれ)は浴衣の染色(そめいろ)も、浅き紫陽花(あじさい)の花になって、小溝(こみぞ)の暗(やみ)に俤(おもかげ)のみ。我はこのまま石になって、と気の遠くなった時、はっと足が出て、風が出て、婦人(おんな)は軒を離れて出た。

小走りに急いで来る、青葉の中に寄る浪のはらはらと爪尖(つまさき)白く、濃い黒髪の房(ふさ)やかな双の鬢(びんづら)、浅葱(あさぎ)の紐(ひも)に結び果てず、海水帽を絞って被(かぶ)った、豊(ゆたか)な頬(ほお)に艶(つや)や

かに靡（なび）いて、色の白いが薄化粧。水色縮緬（みずいろちりめん）の蹴出（けだし）の褄（つま）、はらはら蓮（はちす）の莟（つぼみ）を捌（さば）いて、素足ながら清らかに、草履ばきの埃（ほこり）も立たず、急いで迎えた少年に、ばツたりと藪の前。

「叔母さん、」

と声をかけて、と見るとこれが音に聞えた、燃（もゆ）るような朱の唇、ものいいたさを先んじられて紅梅の花揺（ゆら）ぐよう。黒目勝（くろめがち）の清（すず）しやかに、美しくすなおな眉の、濃きにや過ぐると煙ったのは、五日月（いつかづき）に青柳（あおやぎ）の影やや深き趣あり。浦子というは二十七。

豪商狭島（さじま）の令室で、銑太郎には叔母に当る。

この路を去る十二三町、停車場寄(より)の海岸に、石垣高く松を繞(めぐ)らし、廊下で繋(つな)いで三棟(みむね)に分けた、門には新築の長屋があって、手車の車夫の控える身上(しんしょう)。

裳(もすそ)を厭(いと)う砂ならば路に黄金(こがね)を敷きもせん、空色の洋服の褄を取った姿さえ、身にかなえば唐(から)めかで、羽衣着たりと持て囃(はや)すを、白襟で襲衣(かさね)の折から、羅(うすもの)に綾(あや)の帯の時、湯上りの白粉(おしろい)に扱帯(しごき)は何というやらん。この人のためならば、このあたりの浜の名も、狭島が浦と称(とな)えつびょう、リボンかけたる、笄(こうがい)したる、夏の女の多い中に、海第一と聞えた美女(たおやめ)。

帽子の裡(うち)の日の蔭に、長いまつげのせいならず、甥(おい)

を見た目に冴（さえ）がなく、顔の色も薄く曇って、
「銑さん。」
とばかり云った、浴衣の胸は呼吸（いき）ぜわしい。
「どうしたんです、何を買っていらしったんです。吃驚（びっくり）するほど長かった。」
打見（うちみ）に何の仔細（しさい）はなきが、物怖（ものおじ）したらしい叔母の状（さま）を、たかだか例の毛虫だろう、と笑いながら言う顔を、情（なさけ）らしく熟（じっ）と見て、
「まあ、呑気（のんき）らしい、早附木（マッチ）を取って上げたんじゃありませんか。」
はじめて、ほッとした様子。

「頂戴！　いつかの靴以来です。こうは叔母さんでなくッちゃ出来ない事です。僕もそうだろうと思ったんです。」

「そうだろうじゃありませんわ。」

「じゃ、早附木ではないんですか。」

三

「いいえ、銑さんが煙草（たばこ）を出すと、早附木（マッチ）がないから、打棄（うっちゃ）っておくと、またいつものように、煙草には思い遣（や）りがない、監督のようだなんて云うだろうと思って、

気を利かして、ちょうど、あの店で、」

と身を横に、踵を浮かして、恐いもののように振返って、

「見附かったからね、黙って買って上げようと思って入ったんですがね、お庇で大変な思いをしたんですよ。ああ、恐かった。」

とそのままには足も進まず、がッかりしたような風情である。

「何が、叔母さん。この日中に何が恐いんです。大方また毛虫でしょう、大丈夫、毛虫は追駈けては来ませんから。」

「毛虫どころじゃアありません。」
と浦子は後（うしろ）見らるる状（さま）。声も低う、
「銑さん、よっぽどの間だったでしょう。」
「ザッと一時間……」
半分は懸直（かけね）だったのに、夫人はかえってさもありそうに、
「そうでしたかねえ、私はもっとかと思ったくらい。いつ、店を出られるだろう、と心細いッたらなかったよ。」
「なぜ、どうしたんですね、一体。」
「まあ、そろそろ歩行（ある）きましょう。何だか気草臥（きくたび）れで

もしたようで、頭も脚もふらふらします。」

歩を移すのに引添うて、身体で庇うがごとくにしつつ、

「ほんとに驚いたんですか。そういえば、顔の色もよくないようですよ。」

「そうでしょう、悚然として、未だに寒気がしますもの。」

と肩を窄めて俯向いた、海水帽も前下り、頸白く悄れて連立つ。

少年は顔を斜めに、近々と帽の中。

「まったく色が悪い。どうも毛虫ではないようです

ね。」

これには答えず、やや石段の前を通った。

しばらくして、

「銑さん、」

「ええ、」

「帰途（かえり）に、またここを通るんですか。」

「通りますよ。」

「どうしても通らねば不可（いけ）ませんかねえ、どこぞ他（ほか）に路がないんでしょうか。」

「海ならあります。ここいらは叔母さん、海岸の一筋路ですから、岐路（わかれみち）といっては背後（うしろ）の山へ行（ゆ）くより他（ほか）

にはないんですが、」

「困りましたねえ。」

と、つくづく云う。

「何ね、時刻に因って、汐(しお)の干ている時は、この別荘の前なんか、岩を飛んで渡られますがね、この節の月じゃどうですか、晩方干ないかも知れません。」

「船はありますか。」

「そうですね、渡船(わたしぶね)ッて別にありはしますまいけれど、頼んだら出してくれないこともないでしょう、さきへ行って聞いて見ましょう。」

「そうね。」

「何、叔母さんさえ信用するんなら、船だけ借りて、漕ぐことは僕にも漕げます。僕じゃ危険だというでしょう。」

「何でも可うござんすから、銑さん、貴郎、どうにかして下さい。私はもう帰途にあの店の前を通りたくないんです。」

とまた俯向いたが恐々らしい。

「叔母さん、まあ、一体、何ですか。」と、余りの事に微笑みながら。

四

「もう聞えやしますまいね。」

と憚（はばか）る所あるらしく、声もこの時なお低い。

「何が、どこで、叔母さん。」

「あすこまで、」

「ああ！　汚店（きたなみせ）へ、」

「大きな声をなさんなよ。」と吃驚（びっくり）したように慌（あわただ）しく、瞳（ひとみ）を据えて、密（そっ）という。

「何が聞えるもんですか。」

「じゃあね、言いますけれど、銑さん、私がね、今、早附木（マッチ）を買いに入ると、誰も居ないのよ。」

「へい？」

「下さいな、下さいなッて、そういうとね。穴が開いて、こわれごわれで、鼠の家の三階建のような、取附(とッつき)の三段の古棚の背(うしろ)のね、物置みたいな暗い中から、——藻屑(もくず)を曳(ひ)いたかと思う、汚い服装(なり)の、小さな婆(ばあ)さんがね、よぼよぼと出て来たんです。

髪の毛が真白(まっしろ)でね、かれこれ八十にもなろうかというんだけれど、その割には皺(しわ)がないの、……顔に。……身体(からだ)は痩(や)せて骨ばかり、そしてね、骨が、くなくなと柔かそうに腰を曲げてさ。

天窓(あたま)でものを見るてッたように、白髪(しらが)を振って、ふッ

ふッと息をして、脊の低いのが、そうやって、胸を折ったから、そこらを這(は)うようにして店へ来るじゃありませんか。

　早附木を下さいなッて、云ったけれど聞えません。もっともね、はじめから聞えないのは覚悟だというように、顔を上げてね、人の顔を視(なが)めてさ。目で承りましょうと云うんじゃないの。

　お婆さん、早附木を下さい、早附木を、といった、私の唇の動くのを、熟(じっ)と視めていたッけがね。

　その顔を上げているのが大儀そうに、またがッくり俯向(うつむ)くと、白髪の中から耳の上へ、長く、干からびた

腕を出したんですがね、掌(てのひら)が大きいの。

それをね、けだるそうに、ふらふらとふって、片々(かたかた)の人指(ひとさし)ゆびで、こうね、左の耳を教えるでしょう。聞えないと云うのかね、そんなら可(よ)うござんす。私は何だか一目見ると、厭(いや)な心持がしたんですからね、買わずと可(い)いから、そのまま店を出ようと思うと、またそう行(ゆ)かなくなりましたわ。

弱るじゃありませんか、婆さんがね、けだるそうに腰を伸ばして、耳を、私の顔の傍(そば)へ横向けに差しつけたんです。

ぷんと臭(にお)ったの。何とも言えない、きなツくさいよ

うな、醬油（おしたじ）の焦げるような、厭な臭（におい）よ。」
「や、そりゃ困りましたね。」と、これを聞いて少年も
顰（ひそ）んだのである。
「早附木を下さい。
（はあ？）
（早附木よ、お婆さん。）
（はあ？）
はあッて云うきりなの。目を眠って、口を開けてさ、
臭うでしょう。
（早附木、）ッて私は、まったくよ。銃さん、泣きたく
なったの。

ただもう遁(に)げ出したくッてね、そこいら眗(みまわ)すけれど、貴下(あなた)の姿も見えなかったんですもの。

はあ、長い間よ。

それでもようよう聞えたと見えてね、口をむぐむぐとさして合点々々(がってんがってん)をしたから、また手間を取らないようにと、直ぐにね、銅貨を一つ渡してやると、しばらくして、早附木を一ダース。

そんなには要らないから、包を破いて、自分で一つだけ取って、ああ、厄落し、と出よう、とすると、しっかりこの、」

と片手を下に、袖(そで)をかさねた袂(たもと)を揺(ゆす)ったが、気味悪

そうに、胸をかわして密(そっ)と払い、
「袂をつかまえたのに、引張られて動けないじゃありませんか。」
「かさねがさね、成程、はあ、それから、」

五

「私や、銑さん、どうしようかと思ったんです。何にも云わないで、ぐんぐん引張って、かぶりを掉(ふ)るから、大方、剰銭(つり)を寄越(よこ)そうというんでしょうと思って、留りますとね。

やッと安心したように手を放して、それから向う向きになって、緡（さし）から穴のあいたのを一つ一つ。

それがまたしばらくなの。

私の手を引張るようにして、掌（てのひら）へ呉（く）れました。

ひやりとしたけれど、そればかりなら可（よ）かったのに。

(御新姐様（ごしんぞさま）や)」

と浦子の声、異様に震えて聞えたので、

「ええ、その婆（ばば）が、」

「あれ、銑さん、聞えますよ。」と、一歩（ひとあし）いそがわしく、

ぴったり寄添う。

「その婆が、云ったんですか。」

夫人はまた吐息をついた。

「婆(ばあ)さんがね、ああ。」

（御新姐様や、御身(おみ)ア、すいたらしい人じゃでの、安く、なかまの値で進ぜるぞい。）ッて、皺枯(しわが)れた声でそう云うとね、ぶんと頭へ響いたんです。

そして、すいたらしいッてね、私の手首を熟(じっ)と握って、真黄色(まっきいろ)な、平(ひらっ)たい、小さな顔を振上げて、じろじろと見詰めたの。

その握った手の冷たい事ッたら、まるで氷のようじゃありませんか。そして目がね、黄金目(きんめ)なんです。光ったわ！　貴郎(あなた)。

キラキラと、その凄かった事。」

とばかりで重そうな頭を上げて、俄かに黒雲や起ると思う、憂慮わしげに仰いで視めた。空ざまに目も恍惚、紐を結えた頤の震うが見えたり。

「心持でしょう。」

「いいえ、じろりと見られた時は、その目の光で私の顔が黄色になったかと思うくらいでしたよ。灯に近いと、赤くほてるような気がするのと同一に。

もう私、二条針を刺されたように、背中の両方から悚然として、足もふらふらになりました。

夢中で二三間駈け出すとね、ちゃらんと音がしたの

で、またハッと思いましたよ。お銭(あし)を落したのが先方(さき)へ聞えやしまいかと思って。

何でも一大事のように返した剰銭(つり)なんですもの、落したのを知っては追っかけて来かねやしません。銑さん、まあ、何てコッてしょう、どうした婆さんでしょうねえ。」

されば叔母上の宣(のたま)うごとし。年紀(とし)七十(ななそじ)あまりの、髪の真白(まっしろ)な、顔の扁(ひらた)い、年紀の割に皺(しわ)の少い、色の黄な、耳の遠い、身体(からだ)の臭(にお)う、骨の軟かそうな、挙動(ふるまい)のくなくなした、なおその言(ことば)に従えば、金色(こんじき)に目の光る嫗(おうな)とより、銑太郎は他に答うる術(すべ)を知らなかった。

ただその、早附木(マッチ)一つ買い取るのに、半時ばかり経(た)った仔細(しさい)が知れて、疑(うたがい)はさらりとなくなったばかりであるから、気の毒らしい、と自分で思うほど一向な暢気(のんき)。

「早附木は？　叔母さん。」と魅せられたものの背中を一つ、トンと打つようなのを唐突(だしぬけ)に言った。

「ああ、そうでした。」

と心着くと、これを嫗に握られた、買物を持った右の手は、まだ左の袂(たもと)の下に包んだままで、撫肩(なでがた)の裄(ゆき)をなぞえに、浴衣の筋も水に濡れたかと、ひたひたとしおれて、片袖しるく、悚然(ぞっ)としたのがそのままである。大事なことを見るがごとく、密(そっ)とはずすと、銑太郎も

覗(のぞ)くように目を注いだ。

「おや！」

「…………」

六

黒の唐繻子(とうじゅす)と、薄鼠(うすねずみ)に納戸がかった絹ちぢみに宝づくしの絞(しぼり)の入った、腹合せの帯を漏れた、水紅色(ときいろ)の扱帯(しごき)にのせて、美しき手は芙蓉(ふよう)の花片(はなびら)、風もさそわず無事であったが、キラリと輝いた指環(ゆびわ)の他(ほか)に、早附木(マッチ)らしいものの形も無い。

視詰(みつ)めて、夫人は、
「…………」ものも得(え)いわぬのである。
「ああ、剰銭(つり)と一所に遺失(おと)したんだ。叔母さんどの辺？」
と気早(きばや)に向き返って行(ゆ)こうとする。
「お待ちなさいよ。」
と遮って上げた手の、仔細(しさい)なく動いたのを、嬉しそうに、少年の肩にかけて、見直して呼吸(いき)をついて、
「銑さん、お止(よ)しなさいお止しなさい、気味が悪いから、ね、お止しなさい。」
とさも一生懸命。圧(おさ)えぬばかりに引留めて、

「あんなものは、今頃何に化(な)っているか分りませんよ、
よう、ですから、銑さん。」
「じゃ止します、止しますがね。」
少年は余りの事に、
「はははは、何だか妖物(ばけもの)ででもあるようだ。」と半ば
呟(つぶや)いて、また笑った。
「私は妖物としか考えないの、まさか居ようとは思わ
れないけれど。」
「妖物ですとも、妖物ですがね、そのくなくなした処
や、天窓(あたま)で歩行(ある)きそうにする処から、黄色く※(うね)［＃「亠
／（田＋久）」、200-7］った処なんぞ、何の事はない婆(ばば)の

毛虫だ。毛虫の婆（ばあ）さんです。」

「厭（いや）ですことねえ。」と身ぶるいする。

「何もそんなに、気味を悪がるには当らないじゃありませんか。その婆に手を握られたのと、もしか樹の上から、」

と上を見る。藪（やぶ）は尽きて高い石垣、榎（えのき）が空にかぶさって、浴衣に薄き日の光、二人は月夜を行（ゆ）く姿。

「ぽたりと落ちて、毛虫が頸筋（くびすじ）へ入ったとすると、叔母さん、どっちが厭な心持だと思います。」

「沢山よ、銑さん、私はもう、」

「いえ、まあ、どっちが気味が悪いんですね。」

「そりゃ、だって、そうねえ、どっちがどっちとも言えませんね。」

「そら御覧なさい。」

説き得て可（よ）しと思える状（さま）して、

「叔母さんは、その婆を、妖物か何ぞのように大騒ぎを遣（や）るけれど、気味の悪い、厭な感じ。」

感じ、と声に力を入れて、

「感じというと、何だか先生の仮声（こわいろ）のようですね。」

「気楽なことをおっしゃいよ！」

「だって、そうじゃありませんか、その気味の悪い、厭な感じ、」

「でも先生は、工合(ぐあい)の可(い)いとか、妙なとか、おもしろい感じッて事は、お言いなさるけれど、気味の悪いだの、厭な感じだのッて、そんな事は、めったにお言いなさることはありません。」

「しかしですね、詰(つま)らない婆を見て、震えるほど恐(こわ)がった、叔母さんの風(ふう)ッたら……工合の可(い)い、妙な、おもしろい感じがする、と言ったら、叔母さんは怒るでしょう。」

「当然(あたりまえ)ですわ、貴郎(あなた)。」

「だからこの場合ですもの。やっぱり厭な感じだ。その気味の悪い感じというのが、毛虫とおなじぐらいだ

と思ったらどうです。別に不思議なことは無いじゃありませんか。毛虫は気味が悪い、けれども怪(あやし)いものでも何でもない。」

「そう言えばそうですけれど、だって婆さんの、その目が、ねえ。」

「毛虫にだって、睨(にら)まれて御覧なさい。」

「もじゃもじゃと白髪(しらが)が、貴郎。」

「毛虫というくらいです、もじゃもじゃどころなもんですか、沢山毛がある。」

「まあ、貴下(あなた)の言うことは、蝸牛(でんでんむし)の狂言のようだよ。」

と寂しく笑ったが、

「あれ、」

寺でカンカンと鉦を鳴らした。

「ああ、この路の長かったこと。」

七

釣棹を、卜肩にかけた、処士あり。年紀のころ三十四五。五分刈のなだらかなるが、小鬢さきへ少し兀げた、額の広い、目のやさしい、眉の太い、引緊った口の、やや大きいのも凜々しいが、頬肉が厚く、小鼻に笑ましげな皺深く、下頤から耳の根へ、べたりと髯の

あとの黒いのも柔和である。白地に藍(あい)の縦縞(たてじま)の、縮(ちぢみ)の襯衣(しゃつ)を着て、襟のこはぜも見えそうに、衣紋(えもん)を寛(ゆる)く紺絣(こんがすり)、二三度水へ入ったろう、色は薄く地(じ)も透いたが、糊沢山(のりだくさん)の折目高。

　薩摩下駄(さつまげた)の小倉(こくら)の緒(お)、太いしっかりしたおやゆびで、蝮(まむし)を拵(こしら)えねばならぬほど、弛(ゆる)いばかりか、歪(ゆが)んだのは、水に対して石の上に、これを台にしていたのであった。

　時に、釣れましたか、獲物を入れて、片手に提(ひっさ)ぐべき畚(びく)は、十八九の少年の、洋服を着たのが、代りに持って、連立って、海からそよそよと吹く風に、山へ、さ

らさらと、蘆の葉の青く揃って、二尺ばかり靡く方へ、岸づたいに夕日を背。峰を離れて、一刷の薄雲を出て玉のごとき、月に向って帰途、ぶらりぶらりということは、この人よりぞはじまりける。

「賢君、君の山越えの企ては、大層帰りが早かったですな。」

少年は莞爾やかに、

「それでも一抱えほど山百合を折って来ました。帰って御覧なさい、そりゃ綺麗です。母の部屋へも、先生の床の間へも、ちゃんと活けるように言って来ました。」

「はあ、それは難有い。朝なんざ崖に湧く雲の中にちらちら燃えるようなのが見えて、もみじに朝霧がかかったという工合でいて、何となく高峰の花という感じがしたのに、賢君の丹精で、机の上に活かったのは感謝する。

早く行って拝見しよう、……が、また誰か、台所の方で、私の帰るのを待っているものはなかったですか。」

と小鼻の左右の線を深く、微笑を含んで少年を。

顔を見合わせて此方も笑い、

「ははは、松が大層待っていました。先生のお肴

を頂こうと思って、お午飯（ひる）も控えたって言っていましたっけ。」
「それだ。なかなか人が悪い。」広い額に手を加える。
「それに、母も、先生。お土産を楽しみにして、お腹をすかして帰るからって、言づけをしたそうです。」
「益々（ますます）恐縮。はあ、で、奥さんはどこかへお出かけで。」
「銑さんが一所だそうです。」
「そうすると、その連（つれ）の人も、同じく土産を待つ方なんだ。」
「勿論です。今日ばかりは途中で叔母さんに何にも強請（ねだ）らない。犬川で帰って来て、先生の御馳走（ごちそう）になる

んですって。」

　とまた顔を見る。

　この時、先生愕然（がくぜん）として頸（うなじ）をすくめた。

「あかぬ！　包囲攻撃じゃ、恐るべきだね。就中（なかんずく）、銑太郎などは、自分釣棹をねだって、貴郎（あなた）が何です、と一言の下（もと）に叔母御（おばご）に拒絶された怨（うらみ）があるから、その祟（たた）り容易ならずと可知矣（しるべし）。」

　と蘆の葉ずれに棹を垂れて、思わず観念の眼（まなこ）を塞（ふさ）げば、少年は気の毒そうに、

「先生、買っていらっしゃい。」

「買う？」

「だって一尾（ぴき）も居ないんですもの。」
と今更ながら畚（びく）を覗（のぞ）くと、冷（つめた）い磯（いそ）の香（におい）がして、ざらざらと隅に固まるものあり、方丈記に曰（いわ）く、ごうなは小さき貝を好む。

八

先生は見ざる真似（まね）して、少年が手に傾けた件（くだん）の畚（びく）を横目に、
「生憎（あいにく）、沙魚（はぜ）、海津（かいづ）、小鮒（こぶな）などを商う魚屋がなくって困る。奥さんは何も知らず、銑太郎なお欺くべしじゃ

が、あの、お松というのが、また悪く下情（かじょう）に通じておって、ごうなや川蝦（かわえび）で、鯵（あじ）やおぼこの釣れないことは心得ておるから。これで魚屋へ寄るのは、落語の権助が川狩の土産に、過って蒲鉾（かまぼこ）と目刺を買ったより一層の愚じゃ。

特に餌（えさ）の中でも、御馳走の川蝦は、あの松がしんせつに、そこらで掬（すく）って来てくれたんで、それをちぎって釣る時分は、浮木（うき）が水面に届くか届かぬに、ちょろり、かいず奴（め）が攫（さら）ってしまう。

大切な蝦五つ、瞬く間にしてやられて、ごうなになると、糸も動かさないなどは、誠に恥入るです。

私は賢君が知っとる通り、ただ釣という事におもしろい感じを持って行(や)るのじゃで、釣れようが釣れまいが、トンとそんな事に頓着(とんちゃく)はない。

次第に因ったら、針もつけず、餌なしに試みて可(い)いのじゃけれど、それでは余り賢人めかすようで、気咎(きとがめ)がするから、成るべく餌も附着(くっつ)けて釣る。獲物の有無(ありなし)でおもしろ味に変(かわり)はないで、またこの空畚(からびく)をぶらさげて、蘆(あし)の中を釣棹(つりざお)を担いだ処も、工合の可(い)い感じがするのじゃがね。

その様子では、諸君に対して、とてもこのまま、棹を掉(ふ)っては［＃「掉(ふ)っては」は底本では「掉(ふ)っては」］帰ら

れん。

釣を試みたいと云うと、奥様が過分な道具を調えて下すった。この七本竹の継棹(つぎざお)なんぞ、私には勿体(もったい)ないと思うたが、こういう時は役に立つ。

一つ畳み込んで懐(ふところ)へ入れるとしよう、賢君、ちょっとそこへ休もうではないか。」

と月を見て立停(たちどま)った、山の裾(すそ)に小川を控えて、蘆が吐き出した茶店が一軒。薄い煙に包まれて、茶は沸いていそうだけれど、葦簀張(よしずばり)がぼんやりして、かかる天気に、何事ぞ、雨露に朽ちたりな。

「可(い)いじゃありませんか、先生、畚は僕が持っていま

すから、松なんぞ愚図々々言ったら、ぶッつけてやります。」

無二の味方で頼母しく慰めた。

「いやまた、こう辟易して、棹を畳んで、懐中へ了い込んで、煙管筒を忘れた、という顔で帰る処もおもしろい感じがするで。

それに咽喉も乾いた、茶を一つ飲みましょう。まず休んで、」

と三足ばかり、路を横へ、茶店の前の、一間ばかり蘆が左右へ分れていた、根が白く濡地が透いて見えて、ぶくぶくと蟹の穴、うたかたのあわれを吹いて、茜が

さして、日は未(いま)だ高いが虫の声、艪(ろ)を漕(こ)ぐように、ギイ、ギッチョッ、チョ。

「さあ、お掛け。」

と少年を、自分の床几(しょうぎ)の傍(わき)に居(お)らせて、先生は乾くと言った、その唇を撫(な)でながら、

「茶を一つ下さらんか。」

暗い中から白い服装(なり)、麻の葉いろの巻つけ帯で、草履の音、ひた――ひた、と客を見て早や用意をしたか、蟋蟀(きりぎりす)の囓(かじ)った塗盆(ぬりぼん)に、朝顔茶碗の亀裂(ひび)だらけ、茶渋で錆(さ)びたのを二つのせて、

「あがりまし、」

と据えて出し、腰を屈（かが）めた媼（おうな）を見よ。一筋ごとに美しく櫛（くし）の歯を入れたように、毛筋が透（とお）って、生際（はえぎわ）の揃った、柔かな、茶にやや褐（かば）を帯びた髪の色。黒き毛、白髪（しらが）の塵（ちり）ばかりをも交（まじ）えぬを、切髪（きりかみ）にプツリと下げた、色の白い、艶（つや）のある、細面（ほそおもて）の頤（おとがい）尖（とが）って、鼻筋の衝（つ）と通った、どこかに気高い処のある、年紀（とし）は誰（た）が目も同一（おなじ）……である。

九

「渺々乎（びょうびょうこ）として、蘆（あし）じゃ。お婆さん、好（いい）景色だね。二

三度来て見た処ぢゃけれど、この店の工合が可(い)いせいか、今日は格別に広く感じる。この海の他(ほか)に、またこんな海があろうとは思えんくらいじゃ。」

と頷(うなず)くように茶を一口。茶碗にかかるほど、襯衣(しゃつ)の袖の膨(ふく)らかなので、搔抱(かいいだ)く体(てい)に茶碗を持って。

少年はうしろ向(むき)に、山を視(なが)めて、おつきあいという顔色(かおつき)。先生の影二尺を隔てず、窮屈そうにただもじもじ。

媼(おうな)は威儀正しく、膝(ひざ)のあたりまで手を垂れて、

「はい、申されまする通り、世がまだ開けませぬ泥沼

の時のような蘆原(あしはら)でござるわや。

この川沿(かわぞい)は、どこもかしこも、蘆が生えてあるなれど、私(わし)が小家(こいえ)のまわりには、また多(いこ)う茂ってござる。

秋にもなって見やしゃりませ。丈が高う、穂が伸びて、小屋は屋根に包まれる、山の懐も隠れるけに、月も葉の中から出(で)さされて、蟹(かに)が茎へ上(あが)っての、岡沙魚(おかはぜ)というものが根の処で跳ねるわや、漕(こ)いで入る船の艪櫂(ろかい)の音も、水の底に陰気に聞えて、寂しくなるがの。その時稲が実るでござって、お日和(ひより)じゃ、今年は、作も豊年そうにござります。

もう、このように老い朽ちて、あとを頂く御菩薩(ごぼさつ)の

粒も、五つ七つと、算(かぞ)えるようになったれども、生(しょう)あるものは浅間(あさま)しゅうての、蘆の茂るを見るにつけても、稲の太るが嬉しゅうてなりませぬ、はい、はい。」

と細いが聞くものの耳に響く、透(とお)る声で言いながら、どこをどうしたら笑えよう、辛き浮世の汐風(しおかぜ)に、冷(つめた)く大理石になったような、その仏造った顔に、寂しげに莞爾(にっこり)笑った。鉄漿(かね)を含んだ歯が揃って、貝のように美しい。それとなお目についたは、顔の色の白いのに、その眠ったような繊(ほそ)い目の、紅(くれない)の糸、と見るばかり、赤く線を引いていたのである。

「成程、はあ、いかにも、」

と言ったばかり、嫗の言（ことば）は、この景に対するものをして、約半時の間、未来の秋を想像せしむるに余りあって、先生は手なる茶碗を下にも措（お）かず、しばらく蘆を見て、やがてその穂の人の丈よりも高かるべきを思い、白泡のずぶずぶと、濡土（ぬれつち）に呟（つぶや）く蟹の、やがてさらさらと穂に攀（よ）じて、鋏（はさみ）に月を招くやなど、茫然（ぼうぜん）として視（なが）めたのであった。

蘆の中に路があって、さらさらと葉ずれの音、葦簀（よしず）の外へまた一人、黒い衣（きもの）の嫗が出て来た。

茶色の帯を前結び、肩の幅広く、身もやや肥えて、髪はまだ黒かったが、薄さは条（すじ）を揃えたばかり。生際（はえぎわ）

が抜け上って頭（つむり）の半ばから引詰（ひッつ）めた、ぼんのくどにて小さなおばこに、櫂（かい）の形の笄（こうがい）さした、片頬（かたほ）痩（や）せて、片頬（かたほ）肥（ふと）く、目も鼻も口も頤（あご）も、いびつ形（なり）に曲（ゆが）んだが、肩も横に、胸も横に、腰骨のあたりも横に、だるそうに手を組んだ、これで釣合いを取るのであろう。ただそのままでは根から崩れて、海の方へ横倒れにならねばならぬ。

　肩と首とで、うそうそと、斜めに小屋を差覗（さしのぞ）いて、

「ござるかいの、お婆さん。」

　と、片頬夕日に眩（まぶ）しそう、ふくれた片頬は色の悪さ、蒼（あお）ざめて藍（あい）のよう、銀色のどろりとした目、瞬（またたき）をし

ながら呼んだ。

駄菓子の箱を並べた台の、陰に入って踞んで居た、此方の嫗が顔を出して、

「主か。やれもやれも、お達者でござるわや。」

と、ぬいと起つと、その紅糸の目が動く。

十

来たのが口もあけず、咽喉でものを云うように、顔も静と傾いたるまま、

「主もそくさいでめでたいぞいの。」

「お天気模様でござるわや。暑さには喘ぎ、寒さには悩み、のう、時候よければ蛙のように、くらしの蛇に追われるに、この年になるまでも、甘露の日和と聞くけれども、甘い露は飲まぬわよ、ほほほ、」

と薄笑いした、また歯が黒い。

「おいの、さればいの、お互に砂の数ほど苦しみのたねは尽きぬ事いの。やれもやれも、」と言いながら、斜めに立った［#「立った」は底本では「立った」］廂の下、何を覗くか爪立つがごとくにして、しかも肩腰は造りつけたもののよう、動かざること如朽木。

「若い衆の愚痴より年よりの愚痴じゃ、聞く人も煩さ

かろ、措（お）かっしゃれ、ほほほ。のう、お婆さん。主はさてどこへ何を志して出てござった、山かいの、川かいの。」

「いんにゃの、恐しゅう歯がうずいて、きりきり鑿（のみ）で抉（えぐ）るようじゃ、と苦しむ者があるによって、私（わし）がまじのうて進じょうと、浜へ鱏（えい）の針掘りに出たらばよ、猟師どもの風説（うわさ）を聞かっしゃれ。志す人があって、この川ぞいの三股（みつまた）へ、石地蔵が建つというわいの。」

　それを聞いて、フト振向いた少年の顔を、ぎろりと、その銀色の目で流眄（しりめ）にかけたが、取って十八の学生は、何事も考えなかった。

「や、風説(うわさ)きかぬでもなかったが、それはまことでござるかいの。」

「おいのおいの、こんな難有(ありがた)い奇特なことを、うっかり聞いてござる年紀(とし)ではあるまいがや、ややお婆さん。

主は気が長いで、大方何じゃろうぞいの、地蔵様開眼(かいげん)が済んでから、杖(つえ)を突張(つっぱ)って参らしゃます心じゃろが、お互に年紀じゃぞや。今の時世(ときよ)に、またとない結縁(けちえん)じゃやに因って、半日も早うのう、その難有(ありがた)い人のお姿拝もうと思うての、やらやっと重たい腰を引立(ひった)てて出て来たことよ。」

紅糸(べにいと)の目はまた揺れて、

「奇特にござるわや。さて、その難有(ありがた)い人は誰でござる。」
「はて、それを知らしゃらぬ。主としたものは何ということぞいの。
このさきの浜際に、さるの、大長者(おおちょうじゃ)どのの、お別荘がござるてよ。その長者の奥様じゃわいの。」
「それが御建立なされるかよ。」
「おいの、いんにゃいの、建てさっしゃるはその奥様に違いないが、発願(ほつがん)した篤志(こころざし)の方はまた別にあるといの。
聞かっしゃれ。

その奥様は、世にも珍らしい、三十二相そろわしった美しい方じゃとの、膚(はだ)があたたかじゃに因って人間よ、冷たければ天女じゃ、と皆いうのじゃがの、その長者どのの後妻(うわなり)じゃ、うわなりでいさっしゃる。

よってその長者どのとは、三十の上も年紀が違うて、男の児(こ)が一人ござって、それが今年十八じゃ。

奥様は、それ、継母(ままはは)いの。

気立(きだて)のやさしい、膚も心も美しい人じゃによって、継母継児(ままこ)というようなものではなけれども、なさぬなかの事なれば、万に一つも過失(あやまち)のないように、とその十四の春ごろから、行(おこない)の正しい、学のある先生様を、

内へ頼みきりにして傍（そば）へつけておかしゃった。」

二人は正にそれなのである。

十一

「よいかの、十四の年からこの年まで、四五六七八と五年の間、寝るにも起（おき）るにも附添うて、しんせつにお教えなすった、その先生様のたんせいというものは、一通（ひととおり）の事ではなかったとの。

その効（かい）があってこの夏はの、そのお子がさる立派な学校へ入らっしゃるようになったに就いて、先生様は

邸（やしき）を出て、自分の身体（からだ）になりたいといわっしゃる。それまで受けた恩があれば、お客分にして一生置き申そうということなれど、宗旨々々のお祖師様でも、行（ゆ）きたい処へ行かっしゃる。無理やりに留めますことも出来んでのう。」

「ほんにの、お婆さん。」

「今度いよいよ長者どのの邸を出さっしゃるに就いて、長い間御恩になった、そのお礼心というのじゃよ。何ぞ早や、しるしに残るものを、と言うて、黄金（こがね）か、珠玉（たま）か、と尋ねさっしゃるとの。

その先生様、地蔵尊の一体建立して欲しいと言わさ

れたとよ。
そう云えば何となく、顔容（かおかたち）も柔和での、石の地蔵尊に似てござるお人じゃそうなげな。」
先生は面（おもて）を背けて、笑（えみ）を含んで、思わずその口のあたりを擦（こす）ったのである。
「それは奇特じゃ、小児衆（こどもしゅ）の世話を願うに、地蔵様に似さしった人は、結構にござることよ。」
「さればその事よ。まだ四十にもならっしゃらぬが、慾（よく）も徳も悟ったお方じゃ。何事があっても莞爾々々（にこにこ）とさっせえて、ついぞ、腹立たしったり、悲しがらしった事はないけに、何としてそのように難有（ありがた）い気になら

れたぞ、と尋ねるものがあるわいの。

先生様が言わっしゃるには、伝もない、教（おしえ）もない。私（わし）はどうした結縁（けちえん）か、その顔色（かおつき）から容子（ようす）から、野中にぼんやり立たしましたお姿なり、心から地蔵様が気に入って、明暮（あけくれ）、地蔵、地蔵と念ずる。

痛い時、辛い時、口惜（くちおし）い時、怨（うら）めしい時、情（なさけ）ない時と、事どもが、まああってもよ。待てな、待てな、さてこうした時に、地蔵菩薩（じぞうぼさつ）なら何となさる、と考えれば胸も開いて、気が安らかになることじゃ、と申されたげな。お婆さん、何と奇特な事ではないかの。」

「御奇特でござるのう。」

「じゃでの、何の心願というでもないが、何かしるしをといわるるで思いついた、お地蔵一体建立をといわっしゃる。

折から夏休みにの、お邸中（やしきじゅう）が浜の別荘へ来てじゃに就いて、その先生様も見えられたが、この川添（かわぞい）の小橋の際（きわ）のの、蘆（あし）の中へ立てさっしゃる事になって、今日はや奥さまがの、この切通しの崖（がけ）を越えて、二つ目の浜の石屋が方（かた）へ行（ゆ）かれたげじゃ。

のう、先生様は先生様、また難有（ありがた）いお方として、浄財（おたから）を喜捨なされます、その奥様の事いの。

少（わか）い身そらに、御奇特な、たとえ御自分の心からで

はないとして、その先生様の思召（おぼしめし）に嬉し喜んで従わせえましたのが、はや菩薩の御弟子（みでし）でましますぞいの。

七歳の竜女とやらじゃ。

結縁（けちえん）しょう。年をとると気忙（きぜわ）しゅうて、片時もこうしてはおられぬわいの、はやくその美しいお姿を拝もうと思うての。それで、はい、お婆さん、えッちらえッちら出て来たのじゃ。」

「おう、されば、これから二つ目へおざるかや。」

「さればいの、行くわいの。」

「ござれござれ。私（わし）も店をかたづけたら、路ばたへ出て、その奥様の、帰らしゃますお顔を拝もうぞいの。」

赤目の嫗（おうな）は自から深く打頷（うちうなず）いた。

十二

時に色の青い銀の目の嫗（おうな）は、対手（あいて）の頤（おとがい）につれて、片がりながら、さそわれたように頷（うなず）いたが、肩を曲げたなり手を腰に組んだまま、足をやや横ざまに左へ向けた。

「帰途（かえり）のほどは宵月（よいづき）じゃや、ちらりとしたらお姿を見はずすまいぞや。かぶりものの中、気をつけさっしゃれ。お方くらい、美しい、紅（べに）のついた唇は少ないとの。薄

化粧に変りはのうても、膚(はだ)の白いがその人じゃや、浜方じゃで紛(まぎ)れはないぞの、可(よ)いか、お婆さん、そんなら私(わし)は行くわいの。」

「茶一つ参らぬか、まあ可(い)いで。」

「預けましょ。」

「これは麁末(そまつ)なや。」

「お雑作でござりました。」

と斉(ひと)しく前へ傾きながら、腰に手を据えて、てくてくと片足ずつ、右を左へ、左を右へ、一ツずつ蹈(ふ)んで五足六足(いつあしむあし)。

「ああ、これな、これな。」

と廂の夕日に手を上げて、たそがれかかる姿を呼べば、蘆を裾なる背影。

「おい、」とのみ、見も返らず、ハタと留まって、打傾いた、耳をそのまま言を待つ。

「主、今のことをの、坂下の姉さまにも知らしてやらしゃれ、さだめし、あの児も拝みたかろ。」

聞きつけて、件の嫗、ぶるぶると頭を掉った。

「むんにゃよ、年紀が上だけに、姉さまは御生のことは抜からぬぞの。八丈ヶ島に鐘が鳴っても、うとい耳に聞く人じゃ。それに二つ目へ行かっしゃるに、奥様は通り路。もう先刻に拝んだじゃろうが、念のため

じゃ立寄りましょ。ああ、それよりかお婆さん、」
と片頬(かたほ)を青く捻(ね)じ向けた、鼻筋に一つの目が、じろりと此方(こなた)を見て光った。
「主(ぬし)、数珠(じゅず)を忘れまいぞ。」
「おう、可(よ)いともの、お婆さん、主、その鱏(えい)の針を落さっしゃるな。」
「御念には及ばぬわいの。はい、」
と言って、それなり前途(むこう)へ、蘆を分ければ、廂(ひさし)を離れて、一人は店を引込(ひっこ)んだ。磯(いそ)の風一時(ひとしきり)、行(ゆ)くものを送って吹いて、颯(さっ)と返って、小屋をめぐって、ざわざわと鳴って、寂然(ひっそり)した。

吻々吻と花やかな、笑い声、浜のあたりに遥に聞ゆ。時に一碗の茶を未だ飲干さなかった、先生はツト心着いて、いぶかしげな目で、まず、傍なる少年の並んで坐った背を見て、また四辺を眴したが、月夜の、夕日に返ったような思いがした。

嫗の言が渠を魅したか、その蘆の葉が伸びて、山の腰を蔽う時、水底を船が漕いで、岡沙魚というもの土に跳ね、豆蟹の穂末に月を見る状を、目のあたりに目に浮べて、秋の夜の月の趣に、いつか心の取られた耳へ、蘆の根の泡立つ音、葉末を風の戦ぐ声、あたかも天地の呟き囁くがごとく、我が身の上を語るのを、

ただ夢のように聞きながら、顔の地蔵に似たなどは、おかしと現（うつつ）にも思ったが、いつごろ、どの時分、もう一人の媼（おうな）が来て、いつその姿が見えなくなったか、定かには覚えなかった。たとえば、そよそよと吹く風の、いつ来て、いつ歇（や）んだかを覚えぬがごとく、夕日の色の、何の機（とき）に我が袖（そで）を、山陰へ外れたかを語らぬごとく。

されば その間、およそ、時のいかばかりを過ぎたかを弁（わきま）えず、月夜とばかり思ったのも、明るく晴れた今日である。いつの程にか、継棹（つぎざお）も少年の手に畳まれて、袋に入って、紐までちゃんと結（ゆわ）えてあった。

声をかけて見ようと思う、媼は小屋で暗いから、他(ほか)の一人はそこへと見遣(や)るに、誰(たれ)も無し、月を肩なる、山の裾、蘆を裀(しとね)の寝姿のみ。

「賢、」

と呼んだ、我ながら雉子(きじ)のように聞えたので、呟(せきばらい)して、もう一度、

「賢君、」

「は、」

と快活に返事する。

「今の婆さんは幾歳(いくつ)ぐらいに見えました。」

「この茶店のですか。」

「いや、もう一人、……ここへ来た年寄が居たでしょう。」

「いいえ。」

十三

「あれえ！　ああ、あ、ああ……」

恐（こわ）かった、胸が躍って、圧（おさ）えた乳房重いよう、忌（いま）わしい夢から覚めた。――浦子は、独り蚊帳（かや）の裡（うち）。身の戦（わなな）くのがまだ留（や）まねば、腕を組違えにしっかと両の肩を抱いた、腋（わき）の下から脈を打って、垂々（たらたら）と冷（つめた）い汗。

さてもその夜（よ）は暑かりしや、夢の恐怖（おそれ）に悶（もだ）えしや、紅裏（もみうら）の絹の掻巻（かいまき）、鳩尾（みずおち）を辷（すべ）り退（の）いて、寝衣（ねまき）の衣紋（えもん）崩れたる、雪の膚（はだえ）に蚊帳の色、残燈（ありあけ）の灯に青く染まって、枕（まくら）に乱れた鬢（びん）の毛も、寝汗にしとど濡れたれば、襟白粉（えりおしろい）も水の薫（かおり）、身はただ、今しも藻屑（もくず）の中を浮び出でたかの思（おもい）がする。

まだ身体（からだ）がふらふらして、床の途中にあるような。

これは寝た時に今も変らぬ、別に怪しい事ではない。

二つ目の浜の石屋が方（かた）へ、暮方仏像をあつらえに往（い）った帰りを、厭（いや）な、不気味な、忌わしい、婆（ばば）のあらもの屋の前が通りたくなさに、ちょうど満潮（みちしお）を漕（こ）げたから、

海松布（みるめ）の流れる岩の上を、船で帰って来たせいであろう。艪（ろ）を漕いだのは銑さんであった、夢を漕いだのもやっぱり銑さん。

その時は折悪（おりあし）く、釣船も遊山船（ゆさんぶね）も出払って、船頭たちも、漁、地曳（じびき）で急がしいから、と石屋の親方が浜へ出て、小船を一艘（そう）借りてくれて、岸を漕いでおいでなさい、山から風が吹けば、畳を歩行（ある）くより確（たしか）なもの、船をひっくりかえそうたって、海が合点（がってん）するものではねえと、大丈夫に承合（うけあ）うし、銑太郎もなかなか素人離れがしている由、人の風説（うわさ）も聞いているから、安心して乗って出た。

岩の間をすらすらと縫って、銑さんが船を持って来てくれる間、……私は銀の粉を裏ごしにかけたような美しい砂地に立って、足許（あしもと）まで藍（あい）の絵具を溶いたように、ひたひた軽く寄せて来る、浪に心は置かなかったが、またそうでもない。先刻（さっき）の荒物屋が背後（うしろ）へ来て、あの、また変な声で、御新姐様（ごしんぞさま）や、といいはしまいかと、大抵気を揉（も）んだ事ではない。……

婆さんは幾らも居る、本宅のお針も婆さんなら、自分に伯母が一人、それもお婆さん。第一近い処が、今内に居る、松やの阿母（おふくろ）だといって、この間隣村から尋ねて来た、それも年より。なぜあんなに恐ろしかった

か、自分にも分らぬくらい。
毛虫は怪しいものではないが、一目見ても総毛立つ。おなじ事で、たとえ不気味だからといって、ちっとも怪しいものではないと、銑さんはいうけれど、あの、黄金色(こがねいろ)の目、黄(きいろ)な顔、這(は)うように歩行(ある)いた工合。ああ、思い出しても悚然(ぞっ)とする。
夫人は掻巻の裾(すそ)に障(さわ)って、爪尖(つまさき)からまた悚然とした。
けれどもその時、浜辺に一人立っていて、なんだか怪しいものなぞは世にあるものとは思えないような、気丈夫な考えのしたのは、自分が彳(たたず)んでいた七八間さきの、切立(きった)てに二丈ばかり、沖から燃ゆるような

紅(くれない)の日影もさせば、一面には山の緑が月に映って、練絹(ねりぎぬ)を裂くような、柔(やわらか)な白浪(しらなみ)が、根を一まわり結んじゃ解けて拡がる、大きな高い巌(いわ)の上に、水色のと、白衣(びゃくえ)のと、水紅色(ときいろ)のと、西洋の婦人が三人。——

白衣のが一番上に、水色のその肩が、水紅色のより少し高く、一段下に二人並んで、指を組んだり、裳(もすそ)を投げたり、胸を軽くそらしたり、時々楽しそうに笑ったり、話声は聞えなかったが、さものんきらしく、おもしろそうに遊んでいる。

それをまたその人々の飼犬らしい、毛色のいい、猟虎(らっこ)のような茶色の洋犬(かめ)の、口の長い、耳の大きなの

が、浪際を放れて、巖（いわ）の根に控えて見ていた。
まあ、こんな人たちもあるに、あの婆さんを妖物（ばけもの）か何ぞのように、こうまで恐（こわ）がるのも、と恥かしくもあれば、またそんな人たちが居る世の中に、と頼母（たのも）しく。
……
と、浦子は蚊帳に震えながら思い続けた。

十四

ざんぶと浪に黒く飛んで、螺線（らせん）を描く白い水脚（みずあし）、泳ぎ出したのはその洋犬（かめ）で。

来るのは何ものだか、見届けるつもりであったろう。

長い犬の鼻づらが、水を出て浮いたむこうへ、銑さんが艪(ろ)をおしておいでだった。

うしろの小松原の中から、のそのそと人が来たのに、ぎょっとしたが、それは石屋の親方で。

草履ばきでも濡れさせまいと、船がそこった間だけ、負(おぶ)ってくれて、乗ると漕(こ)ぎ出すのを、水にまだ、足を浸したまま、鷭(ばん)のような姿で立って、腰のふたつ提(さ)げの煙草入(たばこいれ)を抜いて、煙管(きせる)と一所に手に持って、火皿をうつむけにして吹きながら、確かなもんだ確かなもんだと、銑さんの艪(ろ)を誉(ほ)めていた。

もう船が岩の間を出たと思うと、尖った舳（へさき）がするりと辷（すべ）って、波の上へ乗ったから、ひやりとして、胴の間（ま）へ手を支（つ）いた。

その時緑青色のその切立（きった）ての巌（いわ）の、渚（なぎさ）で見たとは趣がまた違って、亀の背にでも乗りそうな、中ごろへ、早薄靄（うすもや）が掛（かか）った上から、白衣（びゃくえ）のが桃色の、水色のが白の手巾（ハンケチ）を、二人で、小さく振ったのを、自分は胴の間に、半ば袖（そで）をついて、倒れたようになりながら、帽子の裡（うち）から仰いで見た。

二つ目の浜で、地曳（じびき）を引く人の数は、水を切った網の尖（さき）に、二筋黒くなって砂山かけて遥（はる）かに見えた。

船は緑の岩の上に、浅き浅葱（あさぎ）の浪を分け、おどろおどろ海草の乱るるあたりは、黒き瀬を抜けても過ぎたが、首きり沈んだり、またぶくりと浮いたり、井桁（いげた）に組んだ棒の中に、生簀（いけす）があちこち、三々五々。鷗（かもめ）がちらちらと白く飛んで、浜の二階家のまわり縁を、行（ゆ）きかいする女も見え、簾（すだれ）を上げる団扇（うちわ）も見え、坂道の切通しを、俥（くるま）が並んで飛ぶのさえ、手に取るように見えたもの。

　陸近（くがぢか）なれば憂慮（きづか）いもなく、ただ景色の好（よ）さに、ああまで恐ろしかった婆（ばば）の家、巨刹（おおでら）の藪（やぶ）がそこと思う灘（なだ）を、いつ漕ぎ抜けたか忘れていたのに、何を考え出して、

また今の厭な年寄。……

——それが夢か。——

「ま、待って、」

はてな、と夫人は、白き頸を枕に着けて、おくれ毛の音するまで、がックりと打かたむいたが、身の戦くことなお留まず。

それとも渚の砂に立って、巌の上に、春秋の美しい雲を見るような、三人の婦人の衣を見たのが夢か。海も空も澄み過ぎて、薄靄の風情も妙に余る。

けれども、犬が泳いでいた、月の中なら兎であろうに。

それにしても、また石屋の親方が、水に彳んだ姿が怪しい。

そういえば用が用、仏像を頼みに行くのだから、と巡礼染みたも心嬉しく、浴衣がけで、草履で、二つ目へ出かけたものが、人の背で浪を渡って、船に乗ろうとは思いもかけぬ。

いやいや思いもかけぬといえば、荒物屋の、あの老婆。通りがかりに、ちょいとほんの燐枝を買いに入ったばかりで、あんな、恐ろしい、忌わしい不気味なものを、しかも昼間見ようとは、それこそ夢にも知らなかった。

船はそのためとして見れば、巌の婦人も夢ではない。

石屋の親方が自分を背負(おぶ)って、世話をしてくれたのも、銑さんが船を漕いだのも、浪も、鷗も夢ではなくって、やっぱり今のが夢であろう。

――「ああ、恐しい夢を見た。」――

と肩がすくんで、裳(もすそ)わなわな、瞳(ひとみ)を据えて恐々(こわごわ)仰ぐ、天井の高い事。前後左右は、どのくらいあるか分らず、凄(すご)くて眴(みまわ)すことさえならぬ、蚊帳(かや)に寂しき寝乱れ姿。

十五

果して夢ならば、海も同じ潮入りの蘆間（あしま）の水。水のどこからが夢であって、どこまでが事実であったか。船はもう一浪（ひとなみ）で、一つ目の浜へ着くようになった時、ここから上って、草臥（くたび）れた足でまた砂を蹈（ふ）もうより、小川尻（おがわじり）へ漕（こ）ぎ上（あが）って、薦の葉を一またぎ、邸（やしき）の背戸の柿の樹へ、と銑さんの言った事は——確（たし）かに今も覚えている。

艪（ろ）よりは潮が押し入れた、川尻のちと広い処を、ふらふらと漕ぎのぼると、浪のさきが飜って、潮の加減も点燈（ひともし）ごろ。

帆柱が二本並んで、船が二艘（そう）かかっていた。舷（ふなばた）を

横に通って、急に寒くなった橋の下、橋杭（はしぐい）に水がひたひたする、隧道（トンネル）らしいも一思い。

　石垣のある土手を右に、左にいつも見る目より、裾（すそ）も近ければ頂もずっと高い、かぶさる程なる山を見つつ、胴ぶくれに広くなった、湖のような中へ、他所（よそ）の別荘の刎橋（はねばし）が、流（ながれ）の半（なかば）、岸近な洲（す）へ掛けたのが、満潮（みちしお）で板も除（の）けてあった、箱庭の電信ばしらかと思うよう、杭がすくすくと針金ばかり。三角形（さんかくなり）の砂地が向うに、蘆の葉が一靡（ひとなび）き、鶴の片翼（かたつばさ）見るがごとく、小松も斑（ふ）に似て十本（ともと）ほど。

　暮れ果てず灯（ともし）は見えぬが、その枝の中を透く

青田越しに、屋根の高いはもう我が家。ここの小松の間を選んで、今日あつらえた地蔵菩薩を——

仏様でも大事ない、氏神にして祭礼を、と銑さんに話しながら見て過ぎると、それなりに川が曲って、ずッと水が狭うなる、左右は蘆が渺として。

船がその時ぐるりと廻った。

岸へ岸へと支うるよう。しまった、潮が留ったと、銑さんが驚いて言った。船べりは泡だらけ。瓜の種、茄子の皮、藁の中へ木の葉が交って、船も出なければ芥も流れず。真水がここまで落ちて来て、潮に逆って揉むせいで。

あせって銑さんのおした船が、がツきと当って杭(くい)に支(つか)えた。泡沫(しぶき)が飛んで、傾いた舷(ふなばた)へ、ぞろりとかかって、さらさらと乱れたのは、一束(ひとたばね)の女の黒髪、二巻ばかり杭に巻いたが、下には何が居るか、泥で分らぬ。

ああ、芥の臭(におい)でもすることか、海松布(みる)の香でもすることか、船へ搦(から)んで散ったのは、自分と同(おなじ)一鬢水(びんみず)の……

——浦子は寝ながら呼吸(いき)を引いた。——

——今も蚊帳に染む梅花の薫(かおり)。——

あ、と一声退(の)こうとする、袖(そで)が風に取られたよう、向うへ引かれて、靡(なび)いたので、此方(こなた)へ曳(ひ)いて圧(おさ)えたそ

の袖に、と見ると怪しい針があった。
　蘆の中に、色の白い痩せた嫗、高家の後室ともあろう、品の可い、目の赤いのが、朦朧と踞んだ手から、蜘蛛の囲かと見る糸一条。
　身悶えして引切ると、袖は針を外れたが、さらさらと髪が揺れ乱れた。
　その黒髪の船に垂れたのが、逆に上へ、ひょろひょろと頬を掠めると思うと――（今もおくれ毛が枕に乱れて）――身体が宙に浮くのであった。
「ああ！」
　船の我身は幻で、杭に黒髪の搦みながら、溺れてい

たのが自分であろうか。

また恐しい嫗の手に、怪しい針に釣り上げられて、この汗、その水、この枕、その夢の船、この身体、四角な室（へや）も穴めいて、膚（はだえ）の色も水の底、おされて呼吸（いき）の苦しげなるは、早や墳墓（おくつき）の中にこそ。呵呀（あなや）、この髪が、と思うに堪えず、我知らず、ハッと起きた。

枕を前に、飜った搔巻（かいまき）を背（せな）の力に、堅いもののごとく腕（かいな）を解いて、密（そ）とその鬢（びん）を搔上（かきあ）げた。我が髪ながらヒヤリと冷たく、褄（つま）に乱れた縮緬（ちりめん）の、浅葱（あさぎ）も色の凄（すご）きまで。

十六

疲れてそのまま、搔巻(かいまき)に頰(ほお)をつけたなり、浦子はうとうととしかけると、胸の動悸(どうき)に髪が揺れて、頭(かしら)を上へ引かれるのである。

「ああ、」

とばかり声も出ず、吃驚(びっくり)したようにまた起直った。

扱帯(しごき)は一層(ひとしお)しゃらどけして、褄(つま)もいとどしく崩れるのを、懶(ものう)げに持て扱いつつ、忙(せわ)しく肩で呼吸(いき)をしたが、

「ええ、誰も来てくれないのかねえ、私が一人でこんなに、」

と重たい髷をうしろへ振って、そのまま仰ざまに倒れそうな、身を揉んで膝で支えて、ハッとまた呼吸を吐くと、トントンと岩に当って、時々崖を洗う浪。松風が寂として、夜が更けたのに心着くほど、まだ一声も人を呼んでは見ないのであった。

「松か、」

夫人は残燈に消え残る、幻のような姿で、蚊帳の中から女中を呼んだ。

けれども、直ぐに寐入ったものの呼覚される時刻でない。

第一（松、）という、その声が、出たか、それとも、

ただ呼んで見ようと心に思ったばかりであるか、それさえも現（うつつ）である。
「松や、」と言って、夫人は我が声に我と我が耳を傾ける。胸のあたりで、声は聞えたようであるが、口へ出たかどうか、心許（こころもと）ない。
まあ、口も利けなくなったのか、と情（なさけ）なく、心細く、焦って、ええと、片手に左右の胸を揺（ゆす）って、
「松や、」と、急（せ）き調子でもう一度。
（松や、）と細いのが、咽喉（のど）を放れて、縁が切れて、たよりなくどこからか、あわれに寂しく此方（こなた）へ聞えて、遥（はる）か間（ま）を隔てた襖（ふすま）の隅で、人を呼んでいるかと疑わ

れた。
「ああ、」とばかり、あらためて、その（松や、）を言おうとすると、溜息になってしまう。蚊帳が煽るか、衾が揺れるか、畳が動くか、胸が躍るか。膝を組み緊めて、肩を抱いても、びくびくと身内が震えて、乱れた褄もはらはらと靡く。
引摑んでまで、撫でつけた、鬢の毛が、煩くも頬へかかって、その都度脈を打って血や通う、と次第に烈しくなるにつれ、上へ釣られそうな、夢の針、汀の嫗。
今にも宙へ、足が枕を離れやせん。この屋根の上に蘆が生えて、台所の煙出しが、水面へあらわれると、

芥溜（ごみため）のごみが淀（よど）んで、泡立つ中へ、この黒髪が倒（さかさ）に、髻（たぶさ）から搦（から）まっていようも知れぬ。あれ、そういえば、軒を渡る浜風が、さらさら水の流るる響（ひびき）。

恍惚（うっとり）と気が遠い天井へ、ずしりという沈んだ物音。船がそこったか、その船には銑太郎と自分が乗って……

今、舷（ふなべり）へ髪の毛が。

「あッ、」と声立てて、浦子は思わず枕許へすッくと立ったが、あわれこれなりに嫗の針で、天井を抜けて釣上げられよう、とあるにもあられず、ばたり膝を支（つ）くと、胸を反らして、抜け出る状（さま）に、裳（もすそ）を外。

蚊帳が顔へ搦んだのが、芬（ぷん）と鼻をついた水の香（におい）。引き息で、がぶりと一口、溺（おぼ）るるかと飲んだ思い、これやがて気つけになりぬ。

目もようよう判然（はっきり）と、蚊帳の緑は水ながら、紅（くれない）の絹のへり、かくて珊瑚（さんご）の枝ならず。浦子は辛うじて蚊帳の外に、障子の紙に描かれた、胸白き浴衣の色、腰の浅葱（あさぎ）も黒髪も、夢ならぬその我が姿を、歴然（ありあり）と見たのである。

十七

しばらくして、浦子は玉(ぎょく)ぼやの洋燈(ランプ)の心を挑(あ)げて、明(あかる)くなった燈(ともし)に、宝石輝く指の尖(さき)を、ちょっと鬢(びん)に触ったが、あらためてまた掻上(かきあ)げる。その手で襟を繕って、扱帯(しごき)の下で褄(つま)を引合わせなどしたのであるが、心には、恐ろしい夢にこうまで疲労して、息づかいさえ切ないのに、飛んだ身体(からだ)の世話をさせられて、迷惑であるがごとき思いがした。

且つその身体を棄(す)てもせず、老実(まめ)やかに、しんせつにあしらうのが、何か我ながら、身だしなみよく、床(ゆか)しく、優しく、嬉しいように感じたくらい。

一つくぐって鳩尾(みずおち)から膝(ひざ)のあたりへずり下った、そ

の扱帯の端を引上げざまに、燈（ともし）を手にして、柳の腰を上へ引いてすらりと立ったが、小用（こよう）に、と思い切った。

時に、障子を開けて、そこが何になってしまったか、浜か、山か、一里塚か、冥途（めいど）の路（みち）か。船虫が飛ぼうも、大きな油虫が駈（か）け出そうも料られない。廊下へ出るのは気がかりであったけれど、なおそれよりも恐ろしかったのは、その時まで自分が寝て居た蚊帳（かや）の内を窺（うかが）って見ることで。

蹴出（けだ）しも雪の爪尖（つまさき）へ、とかくしてずり下り、ずり下る寝衣（ねまき）の褄（つま）を圧（おさ）えながら、片手で燈をうしろへ引いて、ボッとする、肩越のあかりに透かして、蚊帳を覗（のぞ）こう

として、爪立（つまだ）って、前髪をそっと差寄せては見たけれども、夢のために身を悶（もだ）えた、閨（ねや）の内の、情（なさけ）ない状（さま）を見るのも忌（いま）わしし、また、何となく掻巻（かいまき）が、自分の形に見えるにつけても、寝ていて、蚊帳を覗（うかが）うこの姿が透いたら、気絶しないでは済むまいと、思わずよろよろと退（すさ）って、引（ひっ）くるまる裳（もすそ）危（あやう）く、はらりと捌（さば）いて廊下へ出た。

次の室（へや）は真暗（まっくら）で、そこにはもとより誰も居ない。閨（ねや）と並んで、庭を前に三間続きの、その一室（ひとま）を隔てた八畳に、銑太郎と、賢之助が一つ蚊帳。

そこから別に裏庭へ突き出でた角座敷の六畳に、先

生が寝ている筈（はず）。

その方（ほう）にも厠（かわや）はあるが、運ぶのに、ちと遠い。

件（くだん）の次の明室（あきま）を越すと、取着（とッつき）が板戸になって、その台所を越した処に、松という仲働（なかばたらき）、お三と、もう一人女中が三人。

婦人（おんな）ばかりでたよりにはならぬが、近い上に心安い。

それにちと間はあるが、そこから一目の表門の直ぐ内に、長屋だちが一軒あって、抱え車夫が住んでいて、かく旦那（だんな）が留守の折からには、あけ方まで格子戸から灯（あかり）がさして、四五人で、ひそめくもの音。ひしひしと花ふだの響（ひびき）がするのを、保養の場所と大目に見ても、

好(い)いこととは思わなかったが、時にこそよれ頼母(たのも)しい。さらばと、やがて廊下づたい、踵(かかと)の音して、するすると、裳(もすそ)の気勢(けはい)の聞ゆるのも、我ながら寂しい中に、夢から覚めたしるしぞ、と心嬉しく、明室(あきま)の前を急いで越すと、次なる小室(こべや)の三畳は、湯殿に近い化粧部屋。これは障子が明いていた。

中(うち)から風も吹くようなり、傍正面(わきしょうめん)の姿見に、勿(な)、映りそ夢の姿とて、首垂(うなだ)るるまで顔を背(そむ)けた。

新しい檜(ひのき)の雨戸、それにも顔が描かれそう。真直(まっすぐ)に向き直って、衝(つ)と燈(ともしび)を差出しながら、突(つき)あたりへ辿々(たどたど)しゅう。

十八

ばたり、閉めた杉戸の音は、かかる夜ふけに、遠くどこまで響いたろう。

壁は白いが、真暗（まっくら）な中に居て、ただそればかりを力にした、玄関の遠あかり、車夫部屋の例のひそひそ声が、このもの音にハタと留（や）んだを、気の毒らしく思うまで、今夜（こよい）はそれが嬉しかった。

浦子の姿は、無事に厠（かわや）を背後（うしろ）にして、さし置いたその洋燈（ランプ）の前、廊下のはずれに、媚（なまめ）かしく露（あら）われた。

いささか心も落着いて、カチンとせんを、カタカタとさるを抜いた、戸締り厳重な雨戸を一枚。半ば戸袋へするりと開けると、雪ならぬ夜の白砂、広庭一面、薄雲の影を宿して、屋根を越した月の影が、廂（ひさし）をこぼれて、竹垣に葉かげ大きく、咲きかけるか、今、開くと、朝（あした）の色は何々ぞ。紺に、瑠璃（るり）に、紅絞（べにしぼ）り、白に、水紅色（ときいろ）、水浅葱（みずあさぎ）、莟（つぼみ）の数は分らねども、朝顔形（あさがおなり）の手水鉢（ちょうずばち）を、朦朧（もうろう）と映したのである。

　夫人は山の姿も見ず、松も見ず、松の梢（こずえ）に寄る浪の、沖の景色にも目は遣（や）らず、瞳を恍惚（うっとり）見据えるまで、一心に車夫部屋の灯（ともし）を、遥（はるか）に、船の夢の、燈台と力に

しつつ、手を遣ると、……柄杓(ひしゃく)に障(さわ)らぬ。

気にもせず、なお上(うわ)の空で、冷たく瀬戸ものの縁を撫(な)でて、手をのばして、向うまで辷(すべ)らしたが、指にかかる木(こ)の葉もなかった。

目を返して透かして見ると、これはまた、胸に届くまで、近くあり。

直ぐに取ろうとする、柄杓は、水の中をするすると、反対(むこう)まえに、山の方へ柄がひとりで廻った。

夫人は手のものを落したように、俯向(うつむ)いて熟(じっ)と見る。

手水鉢と垣の間の、月の隈(くま)暗き中に、ほのぼのと白く蠢(うごめ)くものあり。

その時、切髪（きりかみ）の白髪（しらが）になって、犬のごとく踞（つくば）ったが、柄杓の柄に、痩（や）せがれた手をしかとかけていた。

夕顔の実に朱の筋の入った状（さま）の、夢の俤（おもかげ）をそのままに、ぼやりと仰向（あおむ）け、

「水を召されますかいの。」

というと、艶（つや）やかな歯でニヤリと笑む。息とともに身を退（ひ）いて、蹌踉々（よろよろ）と、雨戸にぴッたり、風に吹きつけられたようになって面（おもて）を背けた。斜（はす）ッかいの化粧部屋の入口を、敷居にかけて廊下へ半身。真黒（まっくろ）な影法師のちぎれちぎれな襤褸（ぼろ）を被（き）て、茶色の毛のすくすくと蔽（おお）われかかる額のあたりに、皺手（しわで）を

合わせて、真俯向（まうつむ）けに此方（こなた）を拝んだ這身（はいみ）の婆（ばば）は、坂下の藪（やぶ）の姉様（あねさま）であった。

もう筋も抜け、骨崩れて、裳（もすそ）はこぼれて手水鉢、砂地に足を蹈（ふ）み乱して、夫人は橋に廊下へ倒れる。

胸の上なる雨戸へ半面、ぬッと横ざまに突出したは、青ンぶくれの別の顔で、途端に銀色の眼（まなこ）をむいた。

のさのさのさ、頭で廊下をすって来て、夫人の枕に近づいて、ト仰いで雨戸の顔を見た、額に二つ金の瞳、真赤（まっか）な口を横ざまに開けて、

「ふァははは、」

「う、うふふ、うふふ、」と傾（かた）がって、戸を揺（ゆす）って笑う

と、バチャリと柄杓を水に投げて、赤目の媼（おうな）は、

「おほほほほほ、」と尋常な笑い声。

廊下では、その握られた時氷のように冷たかった、といった手で、頰にかかった鬢（びん）の毛を弄（もてあそ）びながら、

「洲（す）の股（また）の御前（ごぜん）も、山の峡（かい）の婆さまも早かったな。」というと、

「坂下の姉（あね）さま、御苦労にござるわや。」と手水鉢から見越して言った。

銀の目をじろじろと、

「さあ、手を貸され、連れて行（い）にましょ。」

十九

「これの、吐く呼吸も、引く呼吸も、もうないかいの、」

と洲の股の御前がいえば、

「水くらわしや、」

と峡の婆が邪慳である。

ここで坂下の姉様は、夫人の前髪に手をさし入れ、白き額を平手で撫でて、

「まだじゃ、ぬくぬくと暖い。」

「手を掛けて肩を上げされ、私が腰を抱こうわいの。」

と例の横あるきにその傾いた形を出したが、腰に組

んだ手はそのままなり。
洲の股の御前、傍(かたわら)より、
「お婆さん、ちょっとその鱏(えい)の針で口の端(はた)縫わっしゃれ、声を立てると悪いわや。」
「おいの、そうじゃの。」と廊下でいって、夫人の黒髪を両手で圧(おさ)えた。
峡の婆、僅(わずか)に手を解き、頤(おとがい)[#ルビの「おとがい」は底本では「おとがひ」]で襟を探って、無性(ぶしょう)らしく撮(つま)み出した、指の爪(つめ)の長く生伸(はえの)びたかと見えるのを、一つぶるぶると掉(ふ)って近づき、お伽話(とぎばなし)の絵に描いた外科医者という体(てい)で、震(おのの)く唇に幽(かすか)に見える、夫人の白歯(しらは)

の上を縫うよ。

浦子の姿は烈（はげ）しく揺れたが、声は始めから得（え）立てなかった。目は睜（みひら）いていたのである

「もう可（よ）いわいの、」

と峡の婆、傍（かたわら）に身を開くと、坂の下の姉様は、夫人の肩の下へ手を入れて、両方の傍（わき）を抱いて起した。

浦子の身は、柔かに半ば起きて凭（もた）れかかると、そのまま庭へずり下りて、

「ござれ、洲の股の御前、」

といって、坂下の姉様、夫人の片手を。

洲の股の御前も、おなじく傍（かたわら）から夫人の片手を。

ぐい、と取って、引立（ひった）てる。右と左へ、なよやかに脇を開いて、扱帯（しごき）の端が縁を離れた。髪の根は髷（まげ）ながら、笄（こうがい）ながら、がツくりと肩に崩れて、早や五足（いつあし）ばかり、釣られ工合に、手水鉢（ちょうずばち）を、裏の垣根へ誘われ行（ゆ）く。

背後（うしろ）に残って、砂地に独り峡の婆、件（くだん）の手を腰に極（き）めて、傾（かた）がりながら、片手を前へ、斜めに一煽（ひとあお）り、ハタと煽ると、雨戸はおのずからキリキリと動いて閉（しま）った。

二人の婆に挟（さしはさ）まれ、一人（いちにん）に導かれて、薄墨の絵のように、潜門（くぐりもん）を連れ出さるる時、夫人の姿は後（うしろ）ざま

に反って、肩へ顔をつけて、振返ってあとを見たが、名残惜しそうであわれであった。

時しも一面の薄霞(うすがすみ)に、処々艶(つや)あるよう、月の影に、雨戸は寂(しん)と連(つらな)って、朝顔の葉を吹く風に、さっと乱れて、鼻紙がちらちらと、蓮歩(れんぽ)のあとのここかしこ、夫人をしとうて散々(ちりぢり)なり。

* * *

* * *

あと白浪(しらなみ)の寄せては返す、渚(なぎさ)長く、身はただ、黄な

る雲を蹈(ふ)むかと、裳(もすそ)も空に浜辺を引かれて、どれだけ来たか、海の音のただ轟々(ごうごう)と聞ゆるあたり。

「ここじゃ、ここじゃ。」

どしりと夫人の横倒(よこたおし)。

「来たぞや、来たぞや、」

「今は早や、気随、気ままになるのじゃに。」

何処(いずこ)の果(はて)か、砂の上。ここにも船の形の鳥が寝ていた。

ぐるりと三人、三(み)つ鼎(がなえ)に夫人を巻いた、金の目と、銀の目と、紅糸(べにいと)の目の六つを、凶(あし)き星のごとくキラキラと砂(いさご)の上に輝かしたが、

「地蔵菩薩祭れ、ふアふア、」と嘲笑って、山の峡がハタと手拍子。

「山の峡は繁昌じゃ、あはは、」と洲の股の御前、足を挙げる。

「洲の股もめでたいな、うふふ、」

と北叟笑みつつ、坂下の媼は腰を捻った。

諸声に、

「ふアふアふア、」

「うふふ、」

「あはははは。」

「坂の下祝いましょ。」

今度は洲の御前が手を拍（う）つ。

「地蔵菩薩祭れ。」

と山の峡が一足出る、そのあとへ臀（いしき）を捻って、

「山の峡は繁昌じゃ。」

「洲の股もめでたいな、」とすらりと出る。

拍子を取って、手を拍って、

「坂の下祝いましょ。」

据え腰で、ぐいと伸び、

「地蔵菩薩祭れ。」

「山の峡は繁昌じゃ、」

「洲の股もめでたいな、」

「坂の下祝いましょ、」

「地蔵菩薩祭れ。」

さす手ひく手の調子を合わせた、浪の調（しらべ）、松の曲。おどろおどろと月落ちて、世はただ靄（もや）となる中に、ものの影が、躍るわ、躍るわ。

二十

ここに、一つ目と二つ目の浜境（はまざかい）、浪間の巌（いわ）を裾（すそ）に浸して、路傍（みちばた）に衝（つ）と高い、一座螺（ら）のごとき丘がある。

その頂へ、あけ方の目を血走らして、大息を吐（つ）いて

彳んだのは、狭島に宿れる鳥山廉平。

例の縞の襯衣に、その絣の単衣を着て、紺の小倉の帯をぐるぐると巻きつけたが、じんじん端折りの空脛に、草履ばきで帽は冠らず。

昨日は折目も正しかったが、露にしおれて甲斐性が無さそう、高い処で投首して、太く草臥れた状が見えた。恐らく驚破といって跳ね起きて、別荘中、上を下へ騒いだ中に、襯衣を着けて一つ一つそのこはぜを掛けたくらい、落着いていたものは、この人物ばかりであろう。

それさえ、夜中から暁へ引出されたような、とり留

めのないなり形（かたち）、他（ほか）の人々は思いやられる。
銃太郎、賢之助、女中の松、仲働（なかばたらき）、抱え車夫はいうまでもない。折から居合わせた賭博仲間（ぶちなかま）の漁師も四五人、別荘を引（ひっ）ぷるって、八方へ手を分けて、急に姿の見えなくなった浦子を捜しに駈（か）け廻る。今しがた路を挟んだ向う側の山の裾を、ちらちらと靄（もや）に点（とも）れて、松明（たいまつ）の火の飛んだもそれよ。廉平がこの丘へ半ば攀（よ）じ上った頃、消えたか、隠れたか、やがて見えなくなった。

もとより当（あて）のない尋ね人。どこへ、と見当はちっとも着かず、ただ足にまかせて、彼方此方（かなたこなた）、同じ処を四

五度（たび）も、およそ二三里の路はもう歩行（ある）いた。

　不祥な言を放つものは、曰（いわ）く厠（かわや）から月に浮かれて、浪に誘われたのであろうも知れず、と即（すなわ）ち船を漕（こ）ぎ出（いだ）したのも有るほどで。

　死んだは、活（い）きたは、本宅の主人へ電報を、と蜘蛛手（くもで）に座敷へ散り乱れるのを、騒ぐまい、騒ぐまい。毛色のかわった犬一疋（いっぴき）、匂（におい）の高い総菜にも、見る目、齅（か）ぐ鼻の狭い土地がら、俤（おもかげ）を夢に見て、山へ百合の花折りに飄然（ひょうぜん）として出かけられたかも料（はか）られぬを、狭島の夫人、夜半より、その行方（ゆくえ）が分らぬなどと、騒ぐまいぞ、各自（おのおの）。心して内分にお捜し申せと、独り押

鎮めて制したこの人。

廉平とても、夫人が魚(うお)の寄るを見ようでなし、こんな丘へ、よもや、とは思ったけれども、さて、どこ、という目的(めあて)がないので、船で捜しに出たのに対して、そぞろに雲を攫(つか)むのであった。

目の下の浜には、細い木が五六本、ひょろひょろと風に揉(も)まれたままの形で、静まり返って見えたのは、時々潮が満ちて根を洗うので、梢(こずえ)はそれより育たぬならん。ちょうど引潮の海の色は、煙の中に藍(あい)を湛(たた)えて、或(あるい)は十畳、二十畳、五畳、三畳、真砂(まさご)の床に絶えては連なる、平らな岩の、天地(あめつち)の奇(く)しき手に、鉄槌(かなづち)の

あとの見ゆるあり、削りかけの鑢（やすり）の目の立ったるあり。鑿（のみ）の歯形を印したる、鋸（のこぎり）の屑（くず）かと欠々（かけかけ）したる、その一つ一つに、白浪の打たで飜るとばかり見えて音のないのは、岩を飾った海松（みる）、ところ、あわび、蠣（かき）などいうものの、夜半（よわ）に吐いた気を収めず、まだほのぼのと揺（ゆら）ぐのが、渚（なぎさ）を籠（こ）めて蒸すのである。

漁家二三。――深々と苫屋（とまや）を伏せて、屋根より高く口を開けたり、家より大きく底を見せたり、ころりころりと大畚（おおびく）が五つ六つ。

さてこの丘の根に引寄せて、一艘苫（そうとま）を掛けた船があった。海士（あま）も簑（みの）きる時雨かな、潮の※（しぶき）［#「さんずい＋散」、240-3］は浴びながら、夜露や厭（いと）う、ともの優しく、よろけた松に小綱を控え、女男（めお）の波の姿に拡げて、すらすらと乾した網を敷寝に、舳（みよし）の口がすやすやと、見果てぬ夢の岩枕。

傍（かたわら）なる苫屋の背戸に、緑を染めた青菜の畠、結い繞（めぐ）らした蘆垣（あしがき）も、船も、岩も、ただなだらかな面平（おもたいら）に、空に躍った刎釣瓶（はねつるべ）も、靄（もや）を放れぬ黒い線（いとすじ）。些（さ）と凹凸なく瞰下（みおろ）さるる、かかる一枚の絵の中に、裳（もすそ）の端さえ、

片袖（かたそで）さえ、美しき夫人の姿を、何処（いずこ）に隠すべくも見えなかった。

廉平は小さなその下界に対して、高く雲に乗ったように、円く靄に包まれた丘の上に、踏（ふみ）はずしそうに崖（がけ）の尖（さき）、五尺の地蔵の像で立ったけれども。

頭（こうべ）を垂れて嘆息した。

さればこの時の風采（ふうさい）は、悪魔の手に捕えられた、一体の善女（ぜんにょ）を救うべく、ここに天降（あまくだ）った菩薩（ぼさつ）に似ず、仙家の僕（しもべ）の誤って廬（ろ）を破って、下界に追い下（おろ）された哀れな趣。

廉平は腕を拱（こまぬ）いて悄然（しょうぜん）としたのである。時に海の

上にひらめくものあり。

翼の色の、鴎（かもめ）や飛ぶと見えたのは、波に静かな白帆の片影。

帆風に散るか、靄（もや）消えて、と見れば、海に露（あらわ）れた、一面大（おおい）なる岩の端へ、船はかくれて帆の姿。

ぴたりとついて留まったが、翻然（ひらり）と此方（こなた）へ向（むき）をかえると、渚（なぎさ）に据（すわ）った丘の根と、海なるその岩との間、離座敷の二三間、中に泉水を湛（たた）えた状（さま）に、路一条（みちひとすじ）、東雲（しののめ）のあけて行（ゆ）く、蒼空（あおぞら）の透くごとく、薄絹の雲左右に分れて、巌（いわ）の面（おも）に靡（なび）く中を、船はただ動くともなく、白帆をのせた海が近づき、やがて横ざまに軽（かろ）くまた渚に

止（とま）った。

帆の中より、水際立って、美しく水浅葱（みずあさぎ）に朝露置いた大輪（おおりん）の花一輪、白砂の清き浜に、台（うてな）や開くと、裳（もすそ）を捌（さば）いて衝（つ）と下り立った、洋装したる一人の婦人。

夜干（よぼし）に敷いた網の中を、ひらひらと拾ったが、朝景色を賞（め）ずるよしして、四辺（あたり）を見ながら、その苫船（とまぶね）に立寄って苫の上に片手をかけたまま、船の方を顧みると、千鳥は啼（な）かぬが友呼びつらん。帆の白きより白衣（びゃくえ）の婦人、水紅色（ときいろ）なるがまた一人、続いて前後に船を離れて、左右に分れて身軽に寄った。

二人は右の舷（ふなばた）に、一人は左の舷に、その苫船に身

を寄せて、互に苫を取って分けて、船の中を差覗いた。淡きいろいろの衣の裳は、長く渚へ引いたのである。

廉平は頂の靄を透かして、足許を差覗いて、渠等三人の西洋婦人、惟うに誂えの出来を見に来たな。苫をふいて伏せたのは、この人々の註文で、浜に新造の短艇ででもあるのであろう。

と見ると二人の脇の下を、翩然と飛び出した猫がある。

トタンに一人の肩を越して、空へ躍るかと、もう一匹、続いて舳から衝と抜けた。最後のは前脚を揃えて海へ一文字、細長い茶色の胴を一畝り畝らしたまで

鮮麗(あざやか)に認められた。
前のは白い毛に茶の斑(まだら)で、中のは、その全身漆のごときが、長く掉(ふ)った尾の先は、舳(みよし)を掠(かす)めて失(う)せたのである。

二十二

その時、前後して、苫(とま)からいずれも面(おもて)を離し、はらはらと船を退(の)いて、ひたと顔を合わせたが、方向(むき)をかえて、三人とも四辺(あたり)を眴(みまわ)して彳(たたず)む状(さま)、おぼろげながら判然(はっきり)と廉平の目に瞰下(みおろ)された。

水浅葱（みずあさぎ）のが立樹に寄って、そこともなく仰いだ時、頂なる人の姿を見つけたらしい。

手を挙げて、二三度続（つづけ）ざまに麾（さしまね）くと、あとの二人もひらひらと、高く手巾（ハンケチ）を掉（ふ）るのが見えた。

要こそあれ。

廉平は雲を抱（いだ）くがごとく上から望んで、見えるか、見えぬか、慌（あわただ）しく頷（うなず）き答えて、直ちに丘の上に踵（くびす）を回（めぐ）らし、栄螺（さざえ）の形に切崩した、処々足がかりの段のある坂を縫って、ぐるぐると駈（か）けて下り、裾（すそ）を伝うて、衝（つ）と高く、ト一飛（ひととび）低く、草を踏み、岩を渡って、およそ十四五分時を経て、ここぞ、と思う山の根の、波に

曝（さら）された岩の上。

綱もあり、立樹もあり、大きな畚（びく）も、またその畚の口と肩ずれに、船を見れば、苫葺（ふ）いたり。あの位高かった、丘は近く頭（かしら）に望んで、崖の青芒（あおすすき）も手に届くに、婦人（おんな）たちの姿はなかった。白帆は早や渚（なぎさ）を彼方（かなた）に、上からは平（たいら）であったが、胸より高く踞（うずく）まる、海の中なる巌（いわ）かげを、明石の浦の朝霧に島がくれ行（ゆ）く風情にして。

かえって別なる船一艘（そう）、ものかげに隠れていたろう。はじめてここに見出（みいだ）されたが、一つ目の浜の方（かた）へ、半町ばかり浜のなぐれに隔つる処に、箱のような小船を

浮べて、九つばかりと、八つばかりの、真黒(まっくろ)な男の児(こ)。一人はヤッシと艪柄(ろづか)を取って、丸裸の小腰を据え、圧(お)すほどに突伏(つッぷ)すよう、引くほどに仰反(のけぞ)るよう、ただそこばかり海が動いて、舳(へさき)を揺り上げ、揺り下すを面白そうに。稚(おさな)い方は、両手に舷(ふなべり)に摑(つか)まりながら、これも裸の肩で躍って、だぶりだぶりだぶりだぶりと同一(おなじ)処にもう一艘、渚に纜(もや)った親船らしい、艪(ろ)を操る児の丈より高い、他の舷へ波を浴びせて、ヤッシッシ。

いや、道草する場合でない。

廉平は、言葉も通じず、国も違って便(たより)がないから、かわって処置せよ、と暗示されたかのごとく、その

苫船（とまぶね）の中に何事かあることを悟ったので、心しながら、気は急ぎ、つかつかと毛脛（けずね）［＃ルビの「けずね」は底本では「げずね」］長く藁草履（わらぞうり）で立寄った。浜に苫船はこれには限らぬから、確（たしか）に、上で見ていたのをと、頂を仰いで一度。まずその二人が前に立った、左の方の舷から、ざくりと苫を上へあげた。……

ざらざらと藁が揺れて、広き額を差入れて、べとりと頤髯（あごひげ）一面なその柔和な口を結んで、足をやや爪立（つまだ）ったと思うと、両の肩で、吃驚（おどろき）の腹を揉（も）んで、けたたましく飛び退（の）いて、下なる網に躓（つまず）いて倒れぬばかり、きょとんとして、太い眉の顰（ひそ）んだ下に、眼（まなこ）を円（つぶら）にし

て四辺(あたり)を眺めた。

これなる丘と相対して、対(むこ)うなる、海の面(おも)にむらむらと蔓(はびこ)った、鼠色の濃き雲は、彼処(かしこ)一座の山を包んで、まだ霽(は)れやらぬ朝靄(あさもや)にて、もの凄(すさま)じく空に冲(ひひ)って、焔(ほのお)の連(つらな)って燃(もゆ)るがごときは、やがて九十度を越えんずる、夏の日を海気につつんで、崖に草なき赤地(あかつち)へ、仄(ほのか)に反映するのである。

かくて一つ目の浜は彎入(わんにゅう)する、海にも浜にもこの時、人はただ廉平と、親船を漕(こ)ぎ繞(めぐ)る長幼二人の裸児(はだかご)あるのみ。

二十三

得も言われぬ顔して、しばらく棒のごとく立っていた、廉平は何思いけん、足を此方（こなた）に返して、ずッと身を大きく巌（いわ）の上へ。

それを下りて、渚（なぎさ）づたい、船を弄（もてあそ）ぶ小児（こども）の前へ。

近づいて見れば、渠等（かれら）が漕（こ）ぎ廻る親船は、その舳（じく）を波打際。朝凪（あさなぎ）の海、穏（おだや）かに、真砂（まさご）を拾うばかりなれば、纜（もやい）も結ばず漾（ただよ）わせたのに、呑気（のんき）にごろりと大の字形（なり）、楫（かじ）を枕の邯鄲子（かんたんし）、太い眉の秀でたのと、鼻筋の通ったのが、真向（まの）けざまの寝顔である。

傍(かたわら)の船も、穉(おさな)いものも、惟(おも)うにこの親の子なので
あろう。
廉平は、ものも言わずに駈(か)け歩行(ある)いた声をまず調えようと、打咳(うちしわぶ)いたが、えへん！　と大きく、調子はずれに響いたので、襯衣(しゃつ)の袖口の弛(ゆる)んだ手で、その口許を蔽(おお)いながら、
「おい、おい。」
寝た人には内証らしく、低調にして小児(こども)を呼んだ。
「おい、その兄さん、そっちの児(こ)。むむ、そうだ、お前達だ。上手に漕ぐな、甘(うま)いものだ、感心なもんじゃな。」

声を掛けられると、跳上(はねあが)って、船を揺(ゆす)ること木(こ)の葉のごとし。

「あぶない、これこれ、話がある、まあ、ちょっと静まれ。

おお、怜悧(りこう)々々、よく言うことを肯(き)くな。

何(なん)じゃ、外じゃないがな、どうだ余り感心したについて、もうちッと上手な処が見せてもらいたいな。

どうじゃ、ずッと漕げるか。そら、あの、そら巌のもっとさきへ、海の真中(まんなか)まで漕いで行(ゆ)けるか、どうじゃろうな。」

寄居虫(やどかり)で釣る小鰒(こふぐ)ほどには、こんな伯父さんに馴染(なじみ)

のない、人馴れぬ里の児は、目を光らすのみ、返事はしないが、年紀上（としうえ）なのが、艪（ろ）の手を止めつつ、けろりで、合点の目色（めつき）をする。
「漕げる？　むむ、漕げる！　豪（えら）いな、漕いで見せな〳〵。伯父さんが、また褒美をやるわ。いや、親仁（おやじ）、何よ、お前の父（とっ）さんか、父爺（とっさん）には黙ってよ、父爺に肯（き）くと、危いとか悪戯（いたずら）をするなとか、何とか言って叱られら。そら、な、可（い）いか、黙って黙って。」
というと、また合点（がってん）々々。よい、と圧（お）した小腕ながら艪を圧す精巧な昆倫（くろんぼ）奴の器械のよう、シッと一声飛

ぶに似たり。疾(はや)い事、但(ただ)し揺れる事、中に乗った幼い方は、アハハアハハ、と笑って跳ねる。

「豪いぞ、豪いぞ。」

というのも憚(はばか)り、たださしまねいて褒めそやした。

小船は見る見る廉平の高くあげた手の指を離れて、岩がくれにやがてただ雲をこぼれた点となンぬ。

親船は他愛がなかった。

廉平は急ぎ足に取って返して、また丘の根の巌を越して、苫船(とまぶね)に立寄って、此方(こなた)の船舷(ふなばた)を横に伝うて、二三度、同じ処を行ったり、来たり。

中ごろで、踞(しゃが)んで畚(びく)の陰にかくれたと思うと、また

突立(つった)って、端の方から苫を撫(な)でたり、上からそっと叩きなどしたが、更にあちこちを眴(みまわ)して、ぐるりと舳(へさき)の方へ廻ったと思うと、向うの舷(ふなばた)の陰になった。

苫がばらばらと煽(あお)ったが、「ああ」と息の下に叫ぶ声。藁(わら)を分けた艶(えん)なる片袖、浅葱(あさぎ)の褄(つま)が船からこぼれて、その浴衣の染(そめ)、その扱帯(しごき)、その黒髪も、その手足も、ちぎれちぎれになったかと、砂に倒れた婦人(おんな)の姿。

二十四

「気を静めて、夫人(おくさん)、しっかりしなければ不可(いけ)ません。

落着いて、可いですか。心を確にお持ちなさいよ。判りましたか、私です。何も恥かしい事はありません、ちっとも極りの悪いことはありませんです。しっかりなさい。御覧なさい、誰も居ないです、ただ私一人です。鳥山たった一人、他には誰も居らんですから。」

海の方を背にして安からぬ状に附添った、廉平の足許に、見得もなく腰を落し、裳を投げて崩折れつつ、両袖に面を蔽うて、ひたと打泣くのは夫人であった。

「ほんとうに夫人、気を落着けて下さらんでは不可ません。突然海へ飛込もうとなすったりなんぞして、

串戯（じょうだん）ではない。ええ、夫人（おくさん）、心が確（たしか）になったですか。」

声にばかり力を籠（こ）めて、どうしようにも先は婦人（おんな）、ひとえに目を見据えて言うのみであった。風そよそよと呼吸（いき）するよう、すすりなきの袂（たもと）が揺れた。浦子は涙の声の下、

「先生、」と幽（かすか）にいう。

「はあ、はあ、」

と、纔（わず）かに便（たより）を得たらしく、我を忘れて擦り寄った。

「私（わ）、私は、もう死んでしまいたいのでございます。」

わッとまた忍び音（ね）に、身悶（みもだ）えして突伏すのである。

「なぜですか、夫人（おくさん）、まだ、どうかしておいでなさる、

ちゃんとなさらなくッては不可んですよ。」

「でも、貴下、私は、もう……」

「はあ、どうなすった、どんなお心持なんですか。」

「先生、」

「はあ、どうですな。」

「私が、あの、海へ入って死のうといたしましたのより、貴下は、もっとお驚きなさいました事がございましょう。」

「…………………」

何と言おうと、黙って唾を呑む。

「私が、私が、こんな処に船の中に、寝て、寝て、」

と泣いじゃくりして、

「寝かされておりましたのに、なお吃驚(びっくり)なさいましてしょうねえ、貴下。」

「……ですが、それは、しかし……」とばかり、廉平は言うべき術(すべ)を知らなかった

「先生、」

これぎり、声の出ない人になろうも知れず、と手に汗を握ったのが、我を呼ばれたので、力を得て、耳を傾け、顔を寄せて、

「は、」

「ここは、どこでございます。」

「ここですか、ここは、一つ目の浜を出端(ではず)れた、崖下の突端(とっぱずれ)の処ですが、」

「もう、夜があけましたのでございますか。」

「明けたですよ。明方です、もう日が当るばかりです。」

聞くや否や、

「ええ！」とまた身を震わした。浦子はそれなり、腰を上げて立とうとして、ままならぬ身をあせって、

「恥かしい、私、恥かしいんですよ。先生、どうしましょう、人が見ます。人が来ると不可(いけ)ません、人に見られるのは厭(いや)ですから、どうぞ死なして下さいまし、

死なして下さいましよ。」

「と、ともかく。ですからな、夫人、人が来ない内に、帰りましょう。まだ大して人通もないですから。疾く、さあ、疾く帰ろうではありませんか。お内へ行って、まず、お心をお鎮めなさい、そうなさい。」

浦子は烈しく頭を掉った。

二十五

為ん術を知らず黙っても、まだ頭をふるのであるから、廉平は茫然として、ただ拳を握って、

「どうなさる。こうしていらしっては、それこそ、人が寄って来るか分りません。第一、捜しに出ましたのでも四人や八人ではありません。」

言いも終らず、あしずりして、

「どうしましょう、私、どうしましょうねえ。どうぞ、どうぞ、貴下(あなた)、一思いに死なして下さいまし、恥かしくっても、死骸(しがい)になれば……」

泣くのに半ば言消(ことき)えて、

「よ、後生ですから、」

も曇れる声なり。

心弱くて叶(かな)うまじ、と廉平はやや屹(きっ)としたものいい

で、

「飛んだ事を！　夫人(おくさん)、廉平がここに居(お)るです。決(け)して、決(け)して、そんな間違(まちがい)はさせんですよ。」

「どうしましょうねえ、」

はッと深く溜息(ためいき)つくのを、

「…………………」

ただ咽喉(のど)を詰めて熟(じっ)と見つつ、思わず引き入れられて歎息した。

廉平は太い息して、

「まあ、貴女(あなた)、夫人(おくさん)、一体どうなさった。」

「訳を、訳をいえば貴下(あなた)、黙って死なして下さいます

よ。もう、もう、もう、こんな汚（けがら）わしいものは、見るのも厭（いや）におなりなさいますよ。」
「いや、厭になるか、なりませんか、黙って見殺しにしましょうか。何しろ、訳をおっしゃって下さい。夫人（おくさん）、廉平です。人にいって悪い事なら、私は盟（ちか）って申しませんです。」
この人の平生はかく盟うのに適していた。
「は、申します、先生、貴下（あなた）だけなら申します。」
「言うて下さるか、それは難有（ありがた）い、むむ、さあ、承りましょう。」
「どうぞ、その、その前（さき）に先生、どこへか、人の居な

い、谷底か、山の中か、島へでも、巌穴(いわあな)へでも、お連れなすって下さいまし。もう、貴下(あなた)にばかりも精一杯、誰にも見せられます身体(からだ)ではないんです。」

袖を僅(わずか)に濡れたる顔、夢見るように恍惚(うっとり)と、朝ぼらけなる酔芙蓉(すいふよう)、色をさました涙の雨も、露に宿ってあわれである。

「人の来ない処といって、お待ちなさい、船ででもどちらへか、」

と心当りがないでもなかった。沖の方へ見え初(そ)めて、小児(こども)の船が靄(もや)から出て来た。

夫人は時にあらためて、世に出たような目(まな)ざしした

が、苫船(とまぶね)を一目見ると、目(ま)ぶちへ、颯(さっ)と――蒼(あお)ざめて、悚然(ぞっ)としたらしく肩をすくめた、黒髪おもげに、沖の方(かた)。

「もし、」

「は、」

「参られますなら、あすこへでも。」

いかにも人は籠(こも)らぬらしい、物凄(ものすさま)じき対岸(むこう)の崖、炎を宿して冥々(めいめい)たり。

「あんな、あんなその、地獄の火が燃えておりますような、あの中へ、」

「結構なんでございます、」と、また打悄(うちしお)れて面(おもて)を背

ける。
　よくよくの事なるべし。
「参りましょうか。靄が霽（は）れれば、ここと向い合った同一（おなじ）ような崖下でありますけれども、途中が海で切れとるですから、浜づたいに人の来る処ではありません。御覧なさい、あの小児（こども）の船を。大丈夫漕（こ）ぐですから、あれに乗せてもらいましょう、どうです。」
　夫人は、がックりして頷（うなず）いた、ものを言うも切なそうに太（いた）く疲労して見えたのである。
「夫人（おくさん）、それでは。」
「はい、」

と言って礼心に、寂しい笑顔して、吻と息。

二十六

「そんな、そんな貴女、詰らん、怪しからん事があるべき次第のものではないです。汚れた身体だの、人に顔は合わされんのとお言いなさるのはその事ですか。はははは、いや、しかし飛んだ目にお逢いでした。ちっとも御心配はないですよ。まあ、その足をお拭きなさい。突然こんな処へ着けたですから、船を離れる時、酷くお濡れなすったようだ。」

廉平は砥に似て蒼き条のある滑かな一座の岩の上に、海に面して見すぼらしく踞んだ、身にただ襯衣を纏えるのみ。

船の中でも人目を厭って、紺がすりのその単衣で、肩から深く包んでいる。浦子の蹴出しは海の色、巌端に蒼澄みて、白脛も水に透くよう、倒れた風情に休らえる。

二人は靄の薄模様。

「構わんですから、私の衣服でお拭きなさい。

何、寒くはないです、寒いどころではないですが、貴女、裾が濡れましたで、気味が悪いでありましょう。」

「いえ、もう潮に濡れて気味が悪いなぞと、申されます身体(からだ)ではありません。」と、投げたように岩の上。

「まだ、おっしゃる！」

「ははは、」と廉平は笑い消したが、自分にも疑いの未(いま)だ解けぬ、蘆(あし)の中なる幻影(まぼろし)を、この際なれば気(け)もない風で、

「夢の中を怪しいものに誘い出されて、苫船(とまぶね)の中で、お身体を……なんという、そんな、そんな事がありますものかな。」

「それでも私、」

と、かかる中にも夫人は顔を赧(あか)らめた。

「覚えがあるのでございますもの。貴下（あなた）が気をつけて下すって、あの苫船の中で漸々（ようよう）自分の身体になりました時も、そうでした、……まあ、お恥かしい。」

といいかけて差俯向（さしうつむ）く、額に乱れた前髪は、歯にも嚙（か）むべく怨（うら）めしそう。

「ですが、ですが、それは心の迷いです。昨日（きのう）あたりからどうかなさって、お身体（からだ）の工合が悪いのでしょう。西洋なぞにも、」

言（ことば）の下に聞き咎（とが）め、

「西洋とおっしゃれば、貴下（あなた）は西洋の婦人（おんな）の方が、私のつかまっておりました船の中を覗（のぞ）いて見て、仔細（しさい）が

ありそうに招いたのを、丘の上から御覧なすって、それでお心着きになりましたって。
その時も、苫を破って獣が飛んで行ったとおっしゃるではございませんか。
ですから私は、」
と早や力なげに、なよなよとするのであった。
「いや、」
と当(あて)なしに大きく言った、が、いやな事はちっともない。どうして発見(みいだ)したかを怪しまれて、湾の口を横ぎって、穉児(おさなご)に船を漕(こ)がせつつ、自分が語ったは、まずその通(とおり)。

「ですけれども、何ですな。」

「いいえ」

今度は夫人から遮って、

「もう昨日（きのう）、二つ目の浜へ参りました途中から、それはそれは貴下（あなた）、忌（いま）わしい恐ろしい事ばかりで、私は何だか約束ごとのように存じます。

三十という年に近いこの年になりますまで、少（わか）い折から何一つ苦労ということは知りませんで、悲しい事も、辛い事もついぞ覚えはありません、まだ実家には両親も達者で居ます身の上ですもの。

腹の立った事さえござんせん、余（あんま）り果報な身体（からだ）で

すから、盈（みつ）れば虧（か）くるとか申します通り、こんな恐しい目に逢いましたので。唯今（ただいま）ここへ船を漕いでくれました小児（こども）たちが、年こそ違いますけれども、そっくり大きいのが銑さん、小さい方が賢之助に肖（に）ておりましたのも、皆（みんな）私の命数で、何かの因縁なんでございましょうから。」

いうことの極めて確かに、心狂える様子もないだけ、廉平は一層（ひとしお）慰めかねる。

二十七

夫人はわずかに語るうちも、あまたたび息を継ぎ、
「小児（こども）と申しても継（まま）しい中で、それでも姉弟（きょうだい）とも、真（ほん）の児（こ）とも、賢之助は可愛くッてなりません。ただ心にかかりますのはそれだけですが、それも長年、貴下（あなた）が御丹精下さいましたお庇（かげ）で、高等学校へ入学も出来ましたのでございますから、きっと私の思いでも、一人前になりましょう。
もう私は、こんな身体（からだ）、見るのも厭（いや）でなりません。ぶつぶつ切って刻んでも棄（す）てたいように思うんですもの、ちっとも残り惜（おし）いことはないのですが、慾（よく）には、この上の願いには、これが、何か、義理とか意気とか

申すので死ぬんなら、本望でございますのに、活(い)きながら畜生道とはどうした因果なんでございましょうねえ。」

　と、心もやや落着いたか、先のようには泣きもせで、濁りも去った涼しい目に、ほろりとしたのを、熟(じっ)と見て、廉平堪(たま)りかねた面色(おももち)して、唇をわななかし、小鼻に柔和な皺(しわ)を刻んで、深く両手を拱(こまぬ)いたが、噫(ああ)、我かつて誓うらく、いかなる時にのぞまんとも、我(わが)心、我が姿、我が相好、必ず一体の地蔵のごとくしかくあるべき也(なり)と、そもさんか菩薩(ぼさつ)。

「夫人(おくさん)、どうしても、貴女(あなた)、怪(あやし)い獣に……という、

疑(うたがい)は解けんですか。」
「はい、お恥かしゅう存じます。」と手を支(つ)いて、誰(たれ)にか詫(わ)び入る、そのいじらしさ。
　眼(まなこ)を閉じたが、しばらくして、
「恐るべきです、恐るべきだ。夢現(ゆめうつつ)の貴女(あなた)には、悪獣(あくじゅう)の体(たい)に見えましたでありましょう。私の心は獣(けだもの)でした。夫人(おくさん)、懺悔(ざんげ)をします。廉平が白状するです。貴女に恥辱を被らしたものは、四脚(よつあし)の獣ではない、獣のような人間じゃ。
　私です。
鳥山廉平一生の迷いじゃ、許して下さい。」と、その

襯衣（しゃつ）ばかりの頸（うなじ）を垂れた。

夫人はハッと顔を上げて、手をつきざまに右視左瞻（とみこうみ）つつ、背（せな）に乱れた千筋（ちすじ）の黒髪、解くべき術（すべ）もないのであった。

「許して下さい。お宅へ参って、朝夕、貴女（あなた）に接したのが因果です。賢君に対して殆（ほと）んど献身的に尽したのは、やがて、これ、貴女に生命を捧げていたのです。

未（いま）だ四十という年にもならんで、御存じの通り、私は、色気もなく、慾気もなく、見得もなく、およそ出世間的に超然として、何か、未来の霊光を認めておるような男であったのを御存じでしょう。

なかなか以（もっ）て、未来の霊光ではなく、貴女のその美しいお姿じゃやった。

けれども、到底尋常では望みのかなわぬことを悟ったですから、こんど当地の別荘をおなごりに、貴女のお傍（そば）を離れるに就いて、非常な手段を用いたですよ。

五年勤労に酬（むく）いるのに、何か記念の品をと望まれて、悟（さとり）も徳もなくていながら、ただ仏体を建てるのが、おもしろい、工合のいい感じがするで、石地蔵を願いました。

今の世に、さような変ったことを言い、かわったことを望むものが、何……をするとお思いなさる。

廉平は魔法づかいじや。」
と石上に跣坐（ふざ）したその容貌（ようぼう）、その風采（ふうさい）、或はしかあるべく見えるのであった。
夫人は、ただもの言わんとして唇のわななくのみ。
「貴女（あなた）も、昨日（きのう）、その地蔵をあつらえにおいでの途中から、怪しいものに憑（つ）かれたとおっしゃった。……すべて、それが魔法なので、貴女を魅して、夢現（ゆめうつつ）の境（きょう）に乗じて、その妄執（もうしゅう）を晴しました。
けれども余りに痛（いたわ）しい。ひとえに獣にとお思いなすって、玉のごときそのお身体（からだ）を、砕いて切っても棄（す）てたいような御容子（ごようす）が、余りお可哀相（かわいそう）で見ておられん。

夫人（おくさん）、真の獣よりまだこの廉平と、思（おぼ）し召す方が、いくらかお心が済むですか。」

夫人はせいせい息を切った。

二十八

「どうですか、余り推（おし）つけがましい申分（もうしぶん）ではありますが、心はおなじ畜生でも、いくらか人間の顔に似た、口を利く、手足のある、廉平の方が可（い）いですか。」

口へ出すとよりは声をのんで、

「貴下（あなた）、」

「…………」

「貴下、」

「…………」

「貴下、ほんとうでございますか。」

「勿論、懺悔（ざんげ）したのじゃで。」

と、眉を開いてきっぱりという。

膝（ひざ）でじりりとすり寄って、

「ええ、嬉しい。貴下、よくおっしゃって下さいました。」

としっかと膝に手をかけて、わッとまた泣きしずむ。

廉平は我ながら、訝（あや）しいまで胸がせまった。

「私と言われて、お喜びになりますほど、それほどの思(おもい)をなさったですか。」

「いいえ、もう、何ともたとえようはございません。死んでも死骸(しがい)が残ります、その獣の爪(つめ)のあと舌のあとのあります、毛だらけな膚(はだ)が残るのですもの。焼きましても狐(きつね)狸(たぬき)の悪い臭(におい)がしましょうかと、心残りがしましたのに、貴下(あなた)、よく、思い切ってそうおっしゃって下さいました。快よく死なれます、死なれるんでございますよ。」

「はてさて、」

「…………」

「じゃ、やっぱり、死ぬのを思い止まっちゃ下さらん。」

顔を見合わせ、打頷き、

「むむ、成程、」

と腕を解いて、廉平は従容として居直った。

「成程、そうじゃ。貴女ほどのお方が、かかる恥辱をお受けなさって、夢にして、ながらえておいでなさる筈ではないのじゃった。

懺悔をいたせば、悪い夢とあきらめて、思い直して頂けることもあろうかと思ったですが、いかにも取返しのつかんお身体にしたのじゃった、恥入ります。

夫人、貴女ばかりは殺しはせんのじゃ。」

「いいえ、飛んだことをおっしゃいます。殿方には何でもないのでございますもの、そして懺悔には罪が消えますと申します、お怨（うら）みには思いません。」
「許して下さるか。」
「女の口から行（ゆ）き過ぎではございますが、」
「許して下さる。」
「はい、」
「それではどうぞ、思い直して、」
「私はもう、」
と衝（つ）と前棲（まえづま）を引寄せる。岩の下を掻（か）いくぐって、下の根のうつろを打って、絶えず、丁々（トントン）と鼓の音の響い

たのが、潮や満ち来る、どッと烈（はげ）しく、ざぶり砕けた波がしら、白滝（しらたき）を倒（さかしま）に、颯（さっ）とばかり雪を崩して、浦子の肩から、頭（つむり）から。

「あ、」と不意に呼吸（いき）を引いた。濡れしおたれた黒髪に、玉のつらなる雫（しずく）をかくれば、南無三（なむさん）浪に攫（さら）わるる、と背（せな）を抱くのに身を凭（もた）せて、観念した顔（かんばせ）の、気高きまでに莞爾（にっこ）として、

「ああ、こうやって一思いに。」

「夫人（おくさん）、おくれはせんですよ。」と、顔につららを注いで言った。打返しがまたざっと。

「※（しぶき）［＃「さんずい＋散」、261-9］がかかる、※［＃「さ

んずい＋散」、261-9］がかかる、危いぞ。」
と、空から高く呼（とば）わる声。
靄（もや）が分れて、海面（うなづら）に兀（こつ）として聳（そび）え立った、巌（いわ）つづき
の見上ぐる上。草蒸す頂に人ありて、目の下に声を懸
けた、樵夫（きこり）と覚しき一個（ひとり）の親仁（おやじ）。面（おもて）長く髪の白きが、
草色の針目衣（はりめぎぬ）に、朽葉色（くちばいろ）の裁着（たッつけ）穿（は）いて、草鞋（わらんじ）を爪反（つまぞ）り
や、巌端（いわばな）にちょこなんと平胡坐（ひらあぐら）かいてぞいたりける。
その岩の面（おも）にひたとあてて、両手でごしごし一挺（ちょう）の、
きらめく刃物を悠々と磨（と）いでいたり。
磨ぎつつ、覗（のぞ）くように瞰下（みおろ）して、
「上へ来さっしゃい、上へ来さっしゃい、浪に引かれ

ると危いわ。」

という。浪は水晶の柱のごとく、倒(さかしま)にほとばしって、今つッ立った廉平の頭上を飛んで、空ざまに攀(よ)ずること十丈、親仁の手許の磨ぎ汁を一洗滌(ひとあらい)、白き牡丹(ぼたん)の散るごとく、巌角(いわかど)に飜って、海面(うなづら)へざっと引く。

「おじご、何を、何をしてござるのか。」と、廉平はわざと落着いて、下からまず声を送った。

「石鑿(いしのみ)を研ぐよ。二つ目の浜の石屋に頼まれての、今度建立さっしゃるという、地蔵様の石を削るわ。」

「や、親仁御(おじご)がな。」

「おお、此方衆(こなたしゅ)はその註文のぬしじゃろ。そうかの。

はて、道理こそ、婆々（ばば）どもが附き纏（まと）うぞ。」

婆々と云うよ、生死（しょうし）を知らぬ夫人の耳に、鋭くその鑿をもって抉（えぐ）るがごとく響いたので、

「もし、」と両膝をついて伸び上った。

「婆（ばば）とお云いなさいますのは。」

「それ、銀目と、金目と、赤い目の奴等（やつら）よ。主達（ぬしたち）が功徳での、地蔵様が建ったが最後じゃ。魔物め、居処（いどこ）がなくなるじゃで、さまざまに祟（たた）りおって、命まで取ろうとするわ。女子衆（おなごしゅ）、心配さっしゃんな、身体（からだ）は清いぞ。」

とて、鑿（のみ）をこつこつ。

「何様それじゃ、昨日（きのう）から、時々黒雲の湧（わ）くように、我等の身体を包みました。婆というは、何ものでござるじゃろう。」と、廉平は揖（ゆう）しながら、手を翳（かざ）して仰いで言った。

皺手（しわで）に呼吸（いき）をハッとかけ、斜めに丁（ちょう）と鑿を押えて、目一杯に海を望み、

「三千世界じゃ、何でも居ようさ。」

「どこに、あの、どこに居ますのでございますえ。」

「それそれそこに、それ、主たちの廻りによ。」

「あれえ、」

「およそ其奴等（そいつら）がなす業じゃ。夜一夜踊りおって［#

「踊りおって」は底本では「踊りおって」」騒々しいわ、畜生ども、」

とハタと見るや、うしろの山に影大きく、眼(まなこ)の光爛々(らんらん)として、知るこれ天宮の一将星。

「動くな！」

と喝(かつ)する下に、どぶり、どぶり、どぶり、と浪よ、浪よ、浪よ渦(うずま)くよ。

同時に、衝(つ)とその片手を挙げた、掌(たなごころ)の宝刀、稲妻の走るがごとく、射て海に入(い)るぞと見えし。

矢よりも疾(はや)く漕寄(こぎよ)せた、同じ童(わらべ)が艪(ろ)を押して、より幼き他の児(ちご)と、親船に寝た以前(さき)の船頭、三体ともに船

に在（あ）り。

斜めに高く底見ゆるまで、傾いた舷（ふなべり）から、二人（にん）半身を乗り出（いだ）して、うつむけに海を覗（のぞ）くと思うと、鉄（くろがね）の腕（かいな）、蕨（わらび）の手、二条の柄がすっくと空、穂尖（ほさき）を短（みじか）に、一斉に三叉（みつまた）の戟（ほこ）を構えた瞬間、畳およそ百余畳、海一面に鮮血（からくれない）。

見よ、南海に巨人あり、富士山をその裾に、大島を枕にして、斜めにかかる微妙の姿。青嵐（あおあらし）する波の彼方（かなた）に、荘厳（そうごん）なること仏のごとく、端麗なること美人に似たり。

怪しきものの血潮は消えて、音するばかり旭（あさひ）の影。

波を渡るか、宙を行くか、白き鵞鳥の片翼、朝風に傾く帆かげや、白衣、水紅色、水浅葱、ちらちらと波に漏れて、夫人と廉平が彳める、岩山の根の巌に近く、忘るるばかりに漕ぐ蒼空。魚あり、一尾舷に飛んで、鱗の色、あたかも雪。

＝＝篇中の妖婆の言葉（がぎぐげご）は凡て、半濁音にてお読み取り下されたく候＝＝

明治三十八（一九〇五）年十二月

底本：「泉鏡花集成４」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９９５（平成７）年10月24日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第九巻」岩波書店
　　１９４２（昭和17）年３月30日発行
※誤植の確認には底本の親本を参照しました。
入力：門田裕志
校正：土屋隆
２００６年11月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。